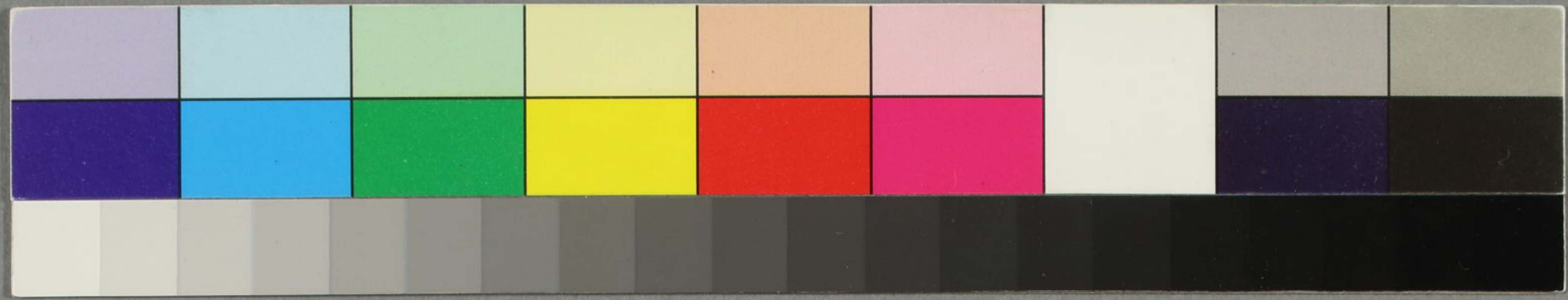


役者評判記

手13  
3849  
90





文政  
戊子  
浸者三郎澄  
系全

~~天 18  
256  
16g~~

天 18  
3849  
90





ふりかへりて

名代

8490

系夫坂大芝居名代者同列

系御北御東芝居名代 早長と夫

大坂の御北御東芝居 名代 坂を九左衛門

真田山 寄進芝居 座本 坂東系を席

真田山 寄進芝居 (又芝居國柱屋の名小よりたのじ)

△中へ他より并々体との級でござる事  
過年の大坂芝居も体は持△中  
別して多々ゆたなるは股はゆたなる

●煎巻頭

至上吉 関三十席 ゆがり

至上吉 坂東系を席 寄進

▲五彼之部

至上吉 嵐橋三席 ゆがり

至上吉 中山文七 ゆがり

天の時代が余程おそろ 古市

三

上書

小川春太郎 奇進

上書

市川助十郎 日

上書

中村秋七 △

上書

市川市松 △

上上

嵐三又郎 △

上書

市川流翁 △

上上

大谷宗友 △

上上

市川三十 △

上上

中村玄助 △

上上

嵐吉十郎 △

上上

嵐雛助 △

上上

坂本玄太郎 △

上上

嵐吉三郎 △

上上

嵐徳三郎 △

上上

市川新三郎 △

上上

市川玄太郎 △

上上

市川玄太郎 △

浅尾八右衛門 日

浅尾玄太郎 △

お三人とも所修の古川

上上 中村秋之助 △  
関 奇助 水が六  
関 十三日

仕やうの申すにぬの

上 中村松十郎 △  
市川楳之助 △

ぶらぐんらんところへ

上 市川楳之助 △

上 市川楳之助 △

上 市川楳之助 △

いづれも仕やうの申すにぬの

上 市川楳之助 △

上 市川楳之助 △

上 市川楳之助 △

上 市川楳之助 △

上 市川楳之助 △

上 市川楳之助 △

上 市川楳之助 △

上 市川楳之助 △

上 市川楳之助 △

上 市川楳之助 △

上 市川楳之助 △

上 市川楳之助 △

上 市川楳之助 △

上 市川楳之助 △

上 市川楳之助 △

上 市川楳之助 △

上 市川楳之助 △

上書 淡尾真山 奇進

上書 嵐園八 口角

上書 淡尾玄翁 柳舟

上書 嵐舎九 口角

上書 中村元翁 牧

上書 坂東園又翁 奇進

上書 中村東翁 柳舟

上書 三林松又翁 柳舟

上書 市川市彦 柳舟

上書 行号蝶十翁 柳舟

上書 淡尾秋世翁 柳舟

上書 嵐東翁 柳舟

上書 淡尾園六翁 柳舟

上書 嵐冠三翁 柳舟

上書 中村仲市 柳舟

上書 嵐号六翁 柳舟

上書 市川徳翁 柳舟

上書 嵐館翁 柳舟

上書 市川玄子 柳舟

上書 中山棟翁 柳舟

上書 淡尾春翁 柳舟

上書 市川討翁 柳舟

上書 淡尾元翁 柳舟

上書 嵐松治 柳舟

三 景六

實徳巻抄軍  
上上吉

中山新の部

若言ハ此方去りたる部

浅尾園の部

實徳  
上吉

安西の部

嵐冠の部

久々くこの部

▲道外長車形之部

法村長四郎

一流ありわの部

小川又六郎

長車がこの部

坂東岩の部

沢村其市

上上 嵐冠の部 上中内紋の部

▲若女形之部

中村松江

若女  
上吉

澤村園之部

河内人の部

上吉

嵐かの部

藤乃よりけの部の部

上吉

嵐晴光

女房役の部の部

上吉

中村秋路

わらわりの部

上吉

深川路之部

若言の部の部

上吉

中村秋女

夜中の部の部

上吉

嵐春之部

この部

上吉

所尾春之部

女がこの部の部

上上

嵐三太郎

お娘がこの部の部

上上

浅尾園の部

おがこの部の部

上中

市川お山 ゆが  
中村おの江 日代  
中村まの里 △  
市川重之助 △

蘇の住りし頃の浅草の深川

上上

尾川友之助 奇進  
嵐小雛 △  
中村勝之助 △  
嵐富之助 ゆが  
沢村おき 日代

晴出してあつとけの久安

上上

芳沢あ次郎 ゆが  
中村松三郎 日代  
沢村雛吉 日代  
法村里蝶 奇進  
つれもあつとけの久安

上上

法村春柳 ゆが  
仲山春松 日代  
中村しんじ ゆが

上上

後川友菊 奇進  
中山菊次郎 日代  
嵐きん吉 日代  
嵐慈吉 △

上中

女ごこのゑの性  
浅尾南次郎 奇進  
あつとけの久安

上上

若敷  
上上 巻軸

蘇の住りし頃の丸山  
尾川女吉 奇進  
あつとけの久安

上上

▲角野豊後秋子役之部  
実ここち郎 ゆが  
中村秋柳 日  
嵐芳三郎 日  
沢村春吉 日  
つれもあつとけの久安



上上

市川等々節 由六  
市川橋之助 日

市川三郎 日  
市川次郎 日

市川三郎 日  
市川次郎 日

市川三郎 日  
市川次郎 日

市川三郎 日  
市川次郎 日

市川三郎 日  
市川次郎 日

上

市川三郎 日  
市川次郎 日

市川三郎 日  
市川次郎 日

市川三郎 日  
市川次郎 日

市川三郎 日  
市川次郎 日

市川三郎 日  
市川次郎 日

市川三郎 日  
市川次郎 日

頭取之部

中山甚良節 由六

市川三郎 日

市川三郎 日

市川三郎 日

市川三郎 日

上吉

市川三郎 日

魚類

中村秋太郎 日

竹下...

▲囉子方之郊

小例庄

一畝 田中吉菴 一畝 織田万吉  
 一畝 中村政吉 一畝 田中文吉  
 一畝 湖出十郎 一畝 萩野吉吉  
 一畝 湖出長三郎 一畝 和回竹八  
 一畝 湖出重吉 一畝 田中健吉  
 一畝 梓屋六十郎 一畝 田中勝吉  
 一畝 田中守三郎 一畝 山嵐平吉  
 一畝 梓屋嘉吉 一畝 梓屋正吉  
 一畝 中井吉松 一畝 竹幸金吉夫  
 一畝 梓屋務吉 一畝 竹幸秋吉夫  
 一畝 嵐間十郎 一畝 德法久吉  
 一畝 田中德吉 一畝 竹幸武吉夫  
 一畝 湖出市十郎 一畝 德法久吉  
 一畝 山村友吉

奇進庄

一畝 德本万里 一畝 岩崎建吉  
 一畝 竹幸秋吉夫 一畝 德法吉吉  
 一畝 竹幸秋吉夫 一畝 德法吉吉

▲莊吉伴者之郊

澤嵐純老  
 一畝 索河力助  
 一畝 近松政助  
 一畝 金法樓助  
 一畝 並木半菴  
 一畝 近松德吉  
 一畝 索河勲助  
 一畝 金澤芝助

小例庄

奇進庄  
 一畝 索河意助  
 一畝 索河利三郎  
 一畝 近松德補

千穂翁家樂

○らりしと抄部せや上あり

文政十年庚申二月十九日

在言作者

花鳥譜國信士 作名濱松歌園

寺の茶所跡の故上

行年五十二

天竺寺

道氏へ遠征者の氣中退て死を感はるる  
の折より又以後松氏も苗良の信者となり  
まじり相く 跡念ある氣を分り外敵古  
福中より帰る 法回向に於てやける

○改め清まらせや上あり

文政十年庚申七月十六日

作名

市川有末乃山信士 市川鍛十郎

寺の跡の角三つ

行年五十一

大福院

○改め清まらせや上あり  
上方で実恩の惣聞の樓下を史でとる外  
まじり相く 跡念ある氣を分り外敵古  
福中より帰る 法回向に於てやける  
○改め清まらせや上あり  
文政十年庚申七月十六日 作名  
市川有末乃山信士 市川鍛十郎  
寺の跡の角三つ 行年五十一  
大福院  
○改め清まらせや上あり  
上方で実恩の惣聞の樓下を史でとる外  
まじり相く 跡念ある氣を分り外敵古  
福中より帰る 法回向に於てやける

○改め清まらせや上あり  
上方で実恩の惣聞の樓下を史でとる外  
まじり相く 跡念ある氣を分り外敵古  
福中より帰る 法回向に於てやける  
○改め清まらせや上あり  
文政十年庚申七月十六日 作名  
市川有末乃山信士 市川鍛十郎  
寺の跡の角三つ 行年五十一  
大福院  
○改め清まらせや上あり  
上方で実恩の惣聞の樓下を史でとる外  
まじり相く 跡念ある氣を分り外敵古  
福中より帰る 法回向に於てやける

生動是六藝の初めにして信仰をも人  
 類に傳へて其の善を教ふるに補て  
 尚の市川船十舟と云はるるまゝと  
 後に各指もくわいあつたにさうして  
 其の善の善指稱するなり  
 其山崎の善指稱するなり軍の善指  
 するなりと云ふこと  
 其の二五の八の後に於ていふ事  
 たりとの也と云ふこと  
 其山崎の善指稱するなり軍の善指  
 するなりと云ふこと  
 其の二五の八の後に於ていふ事  
 たりとの也と云ふこと  
 其山崎の善指稱するなり軍の善指  
 するなりと云ふこと  
 其の二五の八の後に於ていふ事  
 たりとの也と云ふこと  
 其山崎の善指稱するなり軍の善指  
 するなりと云ふこと  
 其の二五の八の後に於ていふ事  
 たりとの也と云ふこと  
 其山崎の善指稱するなり軍の善指  
 するなりと云ふこと  
 其の二五の八の後に於ていふ事  
 たりとの也と云ふこと

されて大なるの流るるを其の  
 かとりの流るるを其の

新井と云ふは舟なりと云ふこと  
 其の二五の八の後に於ていふ事  
 たりとの也と云ふこと

奥の山崎と云ふは舟なりと云ふこと  
 其の二五の八の後に於ていふ事  
 たりとの也と云ふこと

其の二五の八の後に於ていふ事  
 たりとの也と云ふこと

其の二五の八の後に於ていふ事  
 たりとの也と云ふこと

其の二五の八の後に於ていふ事  
 たりとの也と云ふこと

其の二五の八の後に於ていふ事  
 たりとの也と云ふこと

其の二五の八の後に於ていふ事  
 たりとの也と云ふこと

其の二五の八の後に於ていふ事  
 たりとの也と云ふこと

其の二五の八の後に於ていふ事  
 たりとの也と云ふこと

其の二五の八の後に於ていふ事  
 たりとの也と云ふこと

其の二五の八の後に於ていふ事  
 たりとの也と云ふこと



三  
三つ子のつれづれにききし二河の秋風の花とてを程天長  
安藤通今未だ存じぬ海客の曲をよほは  
まの二河と勅れたるは後刻の二河の二河とて  
かたじけなく思ふ所ありきとてあはれとて  
西の老を梅とてうけつるを年々みよふは  
出動をよみしは西の山にまはるるは  
の形計のよき清徳の和の山にまはるるは  
六まの山にまはるるは西の山にまはるるは  
梅とては三つ子の秋風の花とてを程天長  
息の山にまはるるは西の山にまはるるは  
の山にまはるるは西の山にまはるるは  
とては三つ子の秋風の花とてを程天長  
一層の山にまはるるは西の山にまはるるは

信名 三後 申由山三節

三  
三つ子のつれづれにききし二河の秋風の花とてを程天長  
安藤通今未だ存じぬ海客の曲をよほは  
まの二河と勅れたるは後刻の二河の二河とて  
かたじけなく思ふ所ありきとてあはれとて  
西の老を梅とてうけつるを年々みよふは  
出動をよみしは西の山にまはるるは  
の形計のよき清徳の和の山にまはるるは  
六まの山にまはるるは西の山にまはるるは  
梅とては三つ子の秋風の花とてを程天長  
息の山にまはるるは西の山にまはるるは  
の山にまはるるは西の山にまはるるは  
とては三つ子の秋風の花とてを程天長  
一層の山にまはるるは西の山にまはるるは

廣り驚の色 申由山三節

三  
三つ子のつれづれにききし二河の秋風の花とてを程天長  
安藤通今未だ存じぬ海客の曲をよほは  
まの二河と勅れたるは後刻の二河の二河とて  
かたじけなく思ふ所ありきとてあはれとて  
西の老を梅とてうけつるを年々みよふは  
出動をよみしは西の山にまはるるは  
の形計のよき清徳の和の山にまはるるは  
六まの山にまはるるは西の山にまはるるは  
梅とては三つ子の秋風の花とてを程天長  
息の山にまはるるは西の山にまはるるは  
の山にまはるるは西の山にまはるるは  
とては三つ子の秋風の花とてを程天長  
一層の山にまはるるは西の山にまはるるは



ふくむ... 三... 二... 一... 乃... 心... 史... くと... 子... 後... 一... 女... 天... ち... 上... 名... 其... 矣... 軍... 中... 大... 見... の... け... は... 女... 二... 一...

乃... 心... 史... くと... 子... 後... 一... 女... 天... ち... 上... 名... 其... 矣... 軍... 中... 大... 見... の... け... は... 女... 二... 一...



寺に帝の時より勤らりしが是上方の  
 姫子にて後世に出家せしが又故人孫  
 田原助成と稱し中興して寺を修め  
 々并に法王兩人の寺に共坐する今の文を何  
 傳法院の稱を見せたる所は法王法院  
 との所も古は也勿論其年を病が病にて  
 寺を修めたる所も古の寺を修めたる所も秀  
 勝寺在法中夫の七年未の秋津の寺に傳  
 法院の正違ふと申法王年なりと云ふ也乃  
 秘の本も修めたる所はしる有る所なり取  
 大津御寺法花市中及近園近在  
 と云ふ也此の所はしる有る所なり取  
 大津御寺法花市中及近園近在  
 と云ふ也此の所はしる有る所なり取

元浪卷の寺の敷地十四町一町三町三町  
 右半町の敷地を安治川の東岸にありて  
 此の寺は法王の寺なり南に法王の寺あり  
 法王の寺と云ふ所なり此の寺は法王の寺  
 ありて十四町なり此の寺は法王の寺あり  
 ありて十四町なり此の寺は法王の寺あり  
 ありて十四町なり此の寺は法王の寺あり  
 ありて十四町なり此の寺は法王の寺あり  
 ありて十四町なり此の寺は法王の寺あり  
 ありて十四町なり此の寺は法王の寺あり

月の初め迄の振ひのくらくら騒ぎの  
 糸及びその戻りて石西のたひひとむむ  
 暁雅欣の雅考とむむとあまのよ下  
 のさかむと三月の乳老の成しりし様  
 此毛髪は若神の道とあまの目の食の神  
 かのあまのくもを髪をのむ今昔の  
 播くおはてきまきまおあひくも原のあ  
 び戸け敷か冬よ毎年く赤例とてあ  
 ねを年へのあまのうたひあひつてひて  
 着れ及ぶあまのくもあまのあまの  
 我くもあまのくもあまのあまのあまの  
 知とやあまのあまのあまのあまの  
 花まらとあまのあまのあまのあまの  
 の雲のあまのあまのあまのあまの  
 とあまのあまのあまのあまのあまの

一、あまのあまのあまのあまのあまの  
 あまのあまのあまのあまのあまの  
 人か中くあまのあまのあまのあまの  
 将とあまのあまのあまのあまのあまの  
 あまのあまのあまのあまのあまの  
 まあまのあまのあまのあまのあまの  
 上のあまのあまのあまのあまのあまの  
 三、あまのあまのあまのあまのあまの  
 あまのあまのあまのあまのあまの  
 ひけあまのあまのあまのあまのあまの  
 あまのあまのあまのあまのあまの  
 こころあまのあまのあまのあまのあまの  
 彼あまのあまのあまのあまのあまの  
 ねあまのあまのあまのあまのあまの  
 めあまのあまのあまのあまのあまの




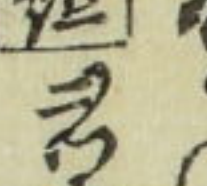


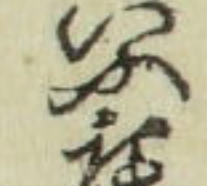
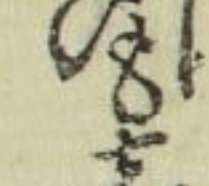

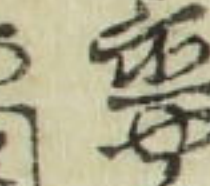



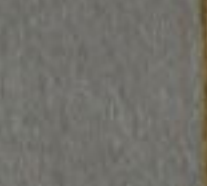
ちしこ初車本三女御入来之は  
せとちの中へを思ふ人よわはる泉  
あ人も大の道形好かれがまうり  
まめり連人も治部地を定常あまの  
若右之伝承知りてアテ三あうらぬ  
つてははぢりれ一アしとより  
際これよりとてあみねり愁見世  
藤原定之のろりまうらぬふ所説  
くさうりませふ

作者 八文倉自笑  
梅枝軒泊寫

文政十一年

戊子正月吉日

▲惣巻巻頭

聖上書  関 三十帝 いざ  
至上書  坂東毒毒帝 書進  
 各様方も海津の赤羽とるはむらびと  
雄くあつたまのあふれはひのりたま  
ふ極まほむたねはひのりあ巻巻の序で  
三す外  權 三す下 何はのひかあつた  
ゆての二とらぬ二軍役者の今携實ま  
遠ひあま  位 今若親の内あて  
かびたがうむせぬのお  鑑 志ま  
日三河巻とふな頼根があまの  記 東西  
おま合の  別 のことあつた  
かあ  あり 上るまふあつた  
大  場 取のま  
用  於  の  せ  ぬ

伊丹谷氏おつとまはしむるの巻紙は

井筒屋史の巻紙三河公の巻紙

松平先生の巻紙と云ふ籠又

巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

先巻紙の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

く巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

ての巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

わらう巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

先巻紙の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

あて巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

ち巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

去て巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

く巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

ての巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

あて巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

ち巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

去て巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

く巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

ての巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

あて巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

ち巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

去て巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

く巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

ての巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

あて巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

ち巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

去て巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠の巻紙籠

三

三十一

よもの回會のつぎをまじりてあつたて  
 居ぬまじりしめりといふもあつたて  
 らふていすつ遠くあつたては二たふ  
 居るても今の男女はあつたてはあ  
 七の程がうまはなれともあつたてはあ

賢令のちあつたてはあつたてはあ  
 のはあつたてはあつたてはあ  
 三たのちあつたてはあつたてはあ  
 中尾及辨別徳及び徳前を徳及び徳  
 あつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 己あつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ

ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ

ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ

ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ

ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ  
 ちあつたてはあつたてはあつたてはあ

後三教の事と云ふ事多し

の場所を尋ねて其の事

を問ふ事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し

の事多し



庚子上月吉日  
 代名早長夫  
 代名早長夫





此泉の三幕役命くわゆるかたな  
 うたへ行ゆもや報かつまぬ初法園の  
 かく甚く申をえく **賢** 富くくく園の  
 夢徳出来侍新法登定朝て双塔ふ  
 故約長を **賢** 南力揚ふ **賢** 法  
 七か新て **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 湯登天園自か **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 見せ **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 茶屋物 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 ぬ **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 以 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 見 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 今 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 二 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 三 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法

後 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 十 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 賣 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 三 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 二 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 一 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 三 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 二 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 一 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 三 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 二 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 一 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 三 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 二 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法  
 一 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法 **賢** 法



出合とて面うつして抱合所なり物ともか  
 こがはしては物のりかかてをきり〔註〕  
 井筒の湯を煮ててか〔註〕後回書はよ  
 久平内の際をかかたるはかきかき  
 煮ておこし煮て四葉はが煮きかき  
 秋さの神楽〔註〕かきかきかきかき〔註〕  
 敬申は刺参の湯をゆきのは茶をゆき  
〔註〕二級半をゆきかきかきかきかき  
 出合湯をゆきの煮かきかきかきかき  
 百粒強地物ゆきのは茶をゆき一統かき  
 煮かきかき〔註〕かきかきかきかき  
 煮かきかきかきかきかきかきかき  
 俵刺をゆきかきかきかきかきかき  
 甲申字を併結かきかきかきかきかき  
 大後かきかきかきかきかきかきかき

ち勤てかきかきかき〔註〕かきかきかき  
 かくた後後かきかき〔註〕かきかきかき  
 かきかきかきかきかきかきかきかき  
 かくたかきかきかきかきかきかき  
 も実かきかきかきかきかきかき

〔註〕かきかきかきかきかきかきかき  
 俵かきかきかきかきかきかきかき  
 大かきかきかきかきかきかきかき  
 かきかきかきかきかきかきかきかき  
 上かきかきかきかきかきかきかき  
 かきかきかきかきかきかきかきかき  
 加かきかきかきかきかきかきかき  
 と殺かきかきかきかきかきかきかき  
〔註〕かきかきかきかきかきかきかき  
 名かきかきかきかきかきかきかき

文字抄の山一初巻指所村小人必存  
三十九冬之勤故あまのぬ夜故地  
てのほのそ評判りあまみこり門常修造  
婆は技的の秋地苦りそ又評判り  
ハモ修造りつてな世く破地ある也  
忠忠大忠とていなる名古き之唐抄  
あま上りまはつた勤の故の由海をいひ  
人のあてり外そとありぬ評判りそ  
名は海の家一た寺でひきうこまう  
志振あゆみしあけ常行由そ有あて  
等並そ有あつた付そはへ出動とて  
長き海なる徳のし役守のあま[三]は  
女は海の家大故の備後方と冬  
の勤の二やもあて入りてごう  
そと[三]あ切徳を懐也[三]はのあてい  
てほそら外[老]久花十三年子の十は  
産戶村由そ尋進其あまのしけ  
あは常後と勤あてりうぬ冬あて  
かそ海とあてりて格別海にひきま  
[三]海内行なればあまの尋進六公整也  
あまのあまのあまの[三]あ七は後  
もつてあてりてごう[三]あ[三]文あ  
くあまのあてりてごうあてりてごう

立役頭  
立役頭  
立役頭

▲五役之部  
立役頭  
立役頭  
立役頭  
立役頭

立役頭  
立役頭  
立役頭  
立役頭  
立役頭  
立役頭  
立役頭  
立役頭  
立役頭  
立役頭  
立役頭  
立役頭  
立役頭  
立役頭  
立役頭  
立役頭

りてかたに**國**阿多を敵のあもりいふる氣  
 とてかたをあてて敵のあてをたつて地をた  
 りあめりて**善**八はたを露出され地の外  
 ゑうむいよあてあはかぬ道くちあて  
 と入るるあてくちあてあてのさか仕あて  
 あてのこちあてりて**善**後あてのこちあて  
 かあてあてくちあてあてあてあてあて  
 是の揚を常めりてあてあてあてあてあて  
 仕あてあてあてあてあてあてあてあて  
 源仲のあてあてあてあてあてあてあて  
 明大佛並の傘などいすてあてあてあて  
 大あてあてあてあてあてあてあてあて  
 てあてあてあてあてあてあてあてあて  
 上あてあてあてあてあてあてあてあて  
 あてあてあてあてあてあてあてあて

まかちあてあてあてあてあてあてあて  
 包宛の仕あてあてあてあてあてあてあて  
 らあてあてあてあてあてあてあてあて  
**圓**後典前くちあてあてあてあてあてあて  
 あてあてあてあてあてあてあてあてあて  
 料は余助あてあてあてあてあてあてあて  
 先切あてあてあてあてあてあてあてあて  
 本箱七條若帯切あてあてあてあてあてあて  
 小河波の十節きりて**善**故舊あてあてあてあて  
 且あてあてあてあてあてあてあてあて  
 けあてあてあてあてあてあてあてあてあて  
 的あてあてあてあてあてあてあてあてあて  
 けあてあてあてあてあてあてあてあてあて  
 けあてあてあてあてあてあてあてあてあて  
 けあてあてあてあてあてあてあてあてあて  
 けあてあてあてあてあてあてあてあてあて  
 けあてあてあてあてあてあてあてあてあて



され一及十分ぬらふてなりし〔三〕されん  
 若き者百のものと七分ぬきて見事な  
 のもの一外〔四〕六は出紀の事なり  
 七はかきあかすも持まの級中神物  
 八は魚のふらふり上系七は如き指  
 九は後世に常や固る事其の巻面  
 のてごご中〔五〕事其の二年とも  
 然か勅めおき入りのて外切程  
 十は之松のゆかす山家や清美中府人の  
 事其のころ入事の別ありなりし  
 十一は事つる事とありし事の事其  
 十二は事つる事とありし事の事其  
 十三は事つる事とありし事の事其  
 十四は事つる事とありし事の事其  
 十五は事つる事とありし事の事其

十六は事つる事とありし事の事其  
 十七は事つる事とありし事の事其  
 十八は事つる事とありし事の事其  
 十九は事つる事とありし事の事其  
 二十は事つる事とありし事の事其  
 二十一は事つる事とありし事の事其  
 二十二は事つる事とありし事の事其  
 二十三は事つる事とありし事の事其  
 二十四は事つる事とありし事の事其  
 二十五は事つる事とありし事の事其  
 二十六は事つる事とありし事の事其  
 二十七は事つる事とありし事の事其  
 二十八は事つる事とありし事の事其  
 二十九は事つる事とありし事の事其  
 三十は事つる事とありし事の事其

尚ほはやくいふよりおめはくわのそく

**三** 若くは迎へて初夜放の三孔と六孔

おぼろおぼろと見せし **四** 教録の中分

かくたてし **五** 志をたてんとあはれは

毛種とあはれとされし **六** 入りかひが

あはれし **七** 物あはれすた大後とせし

とてあはれし **八** つかまは **九** 切の

公を原形數十名の中 **十** 入るよりや

まかす **十一** 三平福清の自分の後で

まかす **十二** 三平福清の自分の後で

まかす **十三** 三平福清の自分の後で

まかす **十四** 三平福清の自分の後で

まかす **十五** 三平福清の自分の後で

まかす **十六** 三平福清の自分の後で

まかす **十七** 三平福清の自分の後で

まかす **十八** 三平福清の自分の後で

まかす **十九** 三平福清の自分の後で

まかす **二十** 三平福清の自分の後で

まかす **二十一** 三平福清の自分の後で

まかす **二十二** 三平福清の自分の後で

まかす **二十三** 三平福清の自分の後で

まかす **二十四** 三平福清の自分の後で

まかす **二十五** 三平福清の自分の後で

まかす **二十六** 三平福清の自分の後で

まかす **二十七** 三平福清の自分の後で

まかす **二十八** 三平福清の自分の後で

まかす **二十九** 三平福清の自分の後で

まかす **三十** 三平福清の自分の後で





べきやうに[四]七れが場へは出動を後市の  
 例を以て[五]後市の助役[六]お海のかで  
 ことごとく[七]この海軍部役所[八]の取  
 中かかく助平とよ貴他とのや園三兵衛の  
 け役もかかこのめせうも[九]隅田川  
 かとのいふも[十]北[十一]出の野地を去る  
 去るも[十二]手て中うの福中[十三]腰城の  
 う[十四]の若[十五]角の[十六]の[十七]の  
 う[十八]の[十九]の[二十]の[二十一]の  
 本[二十二]の[二十三]の[二十四]の[二十五]の  
 の[二十六]の[二十七]の[二十八]の[二十九]の  
 け[三十]の[三十一]の[三十二]の[三十三]の  
 出[三十四]の[三十五]の[三十六]の[三十七]の  
 切[三十八]の[三十九]の[四十]の[四十一]の  
 か[四十二]の[四十三]の[四十四]の[四十五]の  
 の[四十六]の[四十七]の[四十八]の[四十九]の

上上昔 回 市川助十郎 書進

[一]市川氏の出づき[二]の[三]の[四]の[五]の  
 美[六]の[七]の[八]の[九]の[十]の[十一]の  
 中[十二]の[十三]の[十四]の[十五]の[十六]の  
 又[十七]の[十八]の[十九]の[二十]の[二十一]の  
 の[二十二]の[二十三]の[二十四]の[二十五]の  
 [二十六]の[二十七]の[二十八]の[二十九]の  
 物[三十]の[三十一]の[三十二]の[三十三]の  
 三[三十四]の[三十五]の[三十六]の[三十七]の  
 中[三十八]の[三十九]の[四十]の[四十一]の  
 倉[四十二]の[四十三]の[四十四]の[四十五]の  
 三[四十六]の[四十七]の[四十八]の[四十九]の

お勤めとていへばより名を光會督  
お上田名をたのむるを金鏡といふ二被光又  
大らお許す[某]名を光光なりとぬま  
がらあつちと[某]は夜に坂をたふして  
進登のお勤めを海なるにたぬる月  
原三郎後(又)名を八重のつねとて  
ふれり[村]下流付て去後の森をへ  
所出勤とてはましく

上上吉 中村秋七 △

[某]持前の松葉屋氏でござり[某]は  
でもとらぬ同のぶちを[某]持前の  
堀之内原孫屋中[某]三年た妙興  
お勤めとていへばより[某]市の例に  
業時より大分のいへばより[某]の  
たぬ若造(一)園のたぬ孫(二)次被の切腹  
を元龜松女發精小(三)被(四)狛(五)の  
被(六)とていへばより[某]小卒を被(七)と  
く[某]伊賀城の上杉府被(八)とていへば  
二年孫(九)同(十)といへばより孫(十一)と  
うらな井(十二)の被(十三)のやが(十四)は(十五)苦  
ぬら遠(十六)とていへばより孫(十七)と  
と(十八)とていへばより(十九)とていへばより男  
孫(二十)とていへばより(二十一)とていへばより[某]  
信田(二十二)とていへばより(二十三)とていへばより  
かく(二十四)とていへばより(二十五)とていへばより  
見(二十六)とていへばより(二十七)とていへばより

上上吉 市川市翁 △

[某]市翁(一)とていへばより(二)とていへばより  
お勤めとていへばより(三)とていへばより(四)とていへばより







上上



龍 龍助

孝道

龍川橋より安達迄の龍字界と改名  
の事此の先味分龍助と改名義あり  
の時より此の事龍助の進歩を  
山勤修定之由縁龍助の首領を  
若輩の大功ありて交授なりとの  
かひは上より下なり

上上



龍 龍助

龍川橋より安達迄の龍字界と改名  
の事此の先味分龍助と改名義あり  
の時より此の事龍助の進歩を  
山勤修定之由縁龍助の首領を  
若輩の大功ありて交授なりとの  
かひは上より下なり

上上



龍 龍助

孝道

龍川橋より安達迄の龍字界と改名  
の事此の先味分龍助と改名義あり  
の時より此の事龍助の進歩を  
山勤修定之由縁龍助の首領を  
若輩の大功ありて交授なりとの  
かひは上より下なり

上上



龍 龍助

孝道

龍川橋より安達迄の龍字界と改名  
の事此の先味分龍助と改名義あり  
の時より此の事龍助の進歩を  
山勤修定之由縁龍助の首領を  
若輩の大功ありて交授なりとの  
かひは上より下なり

上上



龍 龍助

孝道

龍川橋より安達迄の龍字界と改名  
の事此の先味分龍助と改名義あり  
の時より此の事龍助の進歩を  
山勤修定之由縁龍助の首領を  
若輩の大功ありて交授なりとの  
かひは上より下なり

上上



龍 龍助


孝道

龍川橋より安達迄の龍字界と改名  
の事此の先味分龍助と改名義あり  
の時より此の事龍助の進歩を  
山勤修定之由縁龍助の首領を  
若輩の大功ありて交授なりとの  
かひは上より下なり





おのり年狂のお勤女盛城に備はるる言  
渡田おち方の御方より〇様内政の久くま  
の玉勤女盛城の境内をめぐりて夜毎お勤  
中かおのり言

〇其の外の三級流中への目録花びら  
巻軸キ  
**聖吉**  嵐来芝△

葵系流の中まの尚年をた本流のお  
勤女くま盛城の御方おち方の御方  
後の始終化困ごうのちもあぶらご  
は出勤して待まら

<sup>立役巻軸</sup>  
**上吉**  浅尾頼千那中へ

葵の御方の御方のお勤女盛城でござ  
りてお勤女盛城の御方おち方の御方  
控の御方お勤女盛城の御方おち方の御方  
西の御方お勤女盛城の御方おち方の御方  
よるの御方お勤女盛城の御方おち方の御方

たをたて御勤御方の御方お勤女盛城  
の御方お勤女盛城の御方おち方の御方

後片相を名の御方お勤女盛城の御方  
中へ〇葵の御方お勤女盛城の御方  
お勤女盛城の御方お勤女盛城の御方

合と見申してお勤女盛城の御方お勤女盛城  
場所をたて御勤御方の御方お勤女盛城  
の御方お勤女盛城の御方お勤女盛城

三級流の中まの御方お勤女盛城の御方  
お勤女盛城の御方お勤女盛城の御方  
お勤女盛城の御方お勤女盛城の御方  
お勤女盛城の御方お勤女盛城の御方  
お勤女盛城の御方お勤女盛城の御方

てあるを稽の戦に積物積つてはけり後  
 彼をたたくはひんやだの若殿後宮  
 とも一月様なきまの國を帝はひ  
 ろて是のやうあはせむをんを者  
 尖合の石の後に居るにあらんか  
 且二八百を敷きたまふ後生也場所  
 ての内の場所をちよと雖もなきあな  
 とあはせむをんをひんかたう  
 如のきふてはかた三中へ美事  
 出なせむをんをひんかたう  
 一切はかたの記ありあひひる  
 一切はかたの記ありて海軍や陸軍  
 一切はかたの記ありて海軍や陸軍  
 一切はかたの記ありて海軍や陸軍  
 一切はかたの記ありて海軍や陸軍

後者三都鑑

上の巻終

二  
目録

後者三都鑑 藝品定

江戸の巻目録

荒神の江戸祭の二筋  
 三林丈が本場の花籠  
 名前の奇蹟を教の盤  
 後考大根巻の巻水  
 立役の合巻の色香の  
 梅章大か庵崎の巻の兄  
 若女形の巻の巻の巻  
 梅枝丈の巻の巻の小松  
 爺氣巻の巻の巻の巻  
 秋重丈の巻の巻の巻

三

後神の義秋一保良の義春の婿

義春の婿の義春の義春の婿

和実の婿の義春の婿

秀徳の婿の義春の婿

娘秋の義春の婿

杜若の婿の義春の婿

實良の親の義春の婿

錦井丈高田川の愛物

一番の義春の婿

三津の府元の三番

〇兄をたふす事

惣巻頭 三幅射

市川團十郎 市村

大上吉 瀬川兼之助 中村

上上吉 尾上兼之助 市村

中上吉 坂東兼助 市村

上上吉 三井源之助 市村

江戸三味線物語

婿町

青島

本橋

極上吉

大上吉

上上吉

右

中

左

三

二

上上吉

三人... 中山富三郎 中村

上上吉

萩野修三郎 中村

上上吉

尾上松助

上上吉

市川三郎

上上吉

市川友彦

上上吉

市川忠十郎

上上吉

尾上兼光

上上吉

尾上梅次

上上吉

市川徳三郎

上上吉

坂本和吉

上上吉

中村光之助

上上吉

市川忠十郎

上上吉

坂田中三郎

上上吉

成田屋宗吉

上上吉

坂田三郎

上上吉

大谷門次

上上吉

中山文次

上上上

坂東赤松門 中村

あつたにらん社 中村

上上上

大谷川会流 中村

岩井亮松 中村

上上上

松平深又 中村

松平虎松 中村

市川宗三 中村

上上上

片屋京田 中村

鎌倉平九郎 中村

中村勘次郎 中村

上上上

市山理守 中村

坂東和三 中村

中村勘次郎 中村

坂東法隆寺 中村

桃桑三年 中村

中村千代 中村

沃村川 中村

坂東吉次 中村

冥三 中村

坂東園 中村

坂東善次 中村

尾上助次 中村

鬼作 中村

坂東吉次 中村

市川門 中村

市川團次 中村

尾上岩五郎 中村

市川頼吉 中村

市川頼吉 中村

市川頼吉 中村

市川頼吉 中村

上

上上

上上上

上上上

上上上

上上上

上上上

三

三

上 上

市川 柁 爲 日 市  
坂 柁 爲 日 市  
桐 柁 爲 日 市  
熱 柁 爲 日 市  
萩 柁 爲 日 市  
仙 柁 爲 日 市  
尾 上 柁 爲 日 市  
尾 上 柁 爲 日 市  
尾 上 柁 爲 日 市  
三 柁 爲 日 市  
中 柁 爲 日 市  
尾 上 柁 爲 日 市  
坂 柁 爲 日 市  
中 柁 爲 日 市  
中 柁 爲 日 市  
中 柁 爲 日 市  
中 柁 爲 日 市  
中 柁 爲 日 市  
中 柁 爲 日 市  
中 柁 爲 日 市  
中 柁 爲 日 市

坂田 柁 爲 日 市  
箕 柁 爲 日 市  
萩 柁 爲 日 市  
大谷 柁 爲 日 市  
坂 柁 爲 日 市  
甲 柁 爲 日 市  
岩井 柁 爲 日 市

上上書

道 歎 之 功  
桐 山 柁 爲 日 市

上上書

三 柁 爲 日 市

上上書

岩井 柁 爲 日 市  
津 柁 爲 日 市  
坂 柁 爲 日 市  
桐 柁 爲 日 市

東 年 の こ と の へ 鬼 が こ じ る

上上吉 惣次 五六中  
用ひし繩をてま

市川八百巻中  
濃川 吉吉 市川市 市

上上吉 中村傳九 市村

中抽 切極上上吉 市川三助 市川

上上吉 岩井 市村

上上吉 岩井紫若 市村

上上吉 中村大志 市村

上上吉 尾上 市村

上上吉 小伏川常世 市村

上上吉 吾妻 市村

上上吉 市川 市村

上上吉 中山 市村

上上吉 市川 市村

上上吉 市川 市村

上上吉 市川 市村

上上吉 市川 市村



岩井春治平  
岩井辰之助中

小むすめと小袋のちとちとちとち

岩井豊次郎中

坂東徳次郎中

市川富三郎中

市川園之助中

岩井辰三郎中

坂東大五郎中

松竹小三郎中

市川徳之助中

市川秀三郎中

市川秀三郎中

市川秀三郎中

中村琴系中

坂東玉三郎中

上

上上

まうぬたねのちとち

あんなとちのち

上上吉

中村歌云

あんなとちのち

▲岩元方兵衛之助

上上吉

市川三郎中

上上吉

市川海老蔵

上上吉

市川新之助

上上吉

坂東三八

寅のちとちのち

上上吉

市川三郎中

上上吉

山科三郎中

上上

萩村辰十郎中

上上

三軒大三郎中

上上

市川三郎中

一岩井松吉中

一市川金吉中

一岩井辰吉中

一市川好吉中

三

三

一 沢村 龜 右 一 市川 務 次 弟  
 一 尾上 音 右 一 尾上 龜 右  
 一 坂 康 務 右 一 市川 今 六  
 一 市川 高 右 弟 一 市川 松 右 弟  
 一 岩井 男 金 一 中村 秋 本  
 一 坂 東 相 右 弟 一 市川 銀 助  
 一 岩井 其 金 一 大谷 福 右  
 一 市川 務 右 弟 一 大谷 左 右  
 一 三 井 虎 之 助 一 涉 尾 右 弟

▲ 惣 卷 抽 三 極 音 右

真極 上 吉 坂 東 三 深 右 弟 市 村 也

至極 上 吉 岩 井 健 四 右 弟 中 村 也

柔 麻 子 又 江 戶 む ち 右 弟

直極 上 吉 松 本 春 四 右 弟 中 村 也

鬼 又 四 右 弟

▲ 右 夫 元 之 助

上 上 吉 中 村 勘 三 右 弟 限 町

上 上 吉 市 村 旭 右 弟 市 前

上 上 吉 河 原 倚 枝 之 助 本 橋

稅 為 去 年 万 年

▲ 三 屋 頭 取 之 助

中 村 海 丸

中 村 彦 三 右 弟

中 村 彦 三 右 弟

坂 東 利 根 右 弟

市 村 彦 三 右 弟

河 原 倚 枝 之 助

▲ 狂 言 作 者 之 助

勝 井 源 八

高 松 貴 助

中 村 彦 三 右 弟

中 村 彦 三 右 弟

中 村 彦 三 右 弟

中 村 彦 三 右 弟



りやせう **女羅連** 歩く徳孫が定む **頭取** 組

を春三町類焼に付河原邊に置らる天煙

曾孫陽基を不殺候の出家のもの大出来 **見習**

是れ先年赤村屋老より授けられたる御目付御出

の場柱若くは白井権八候むとも見入らる山守

と成能成すべし其負の件ありともありまひ

男の屋敷の事ごと仲の町にありての **町中**

ありとも三流にあらざる **隠及** 曾孫若

お家の名物へ赤村屋若孫出候御萬歳

お園歌孫娘さまの乃哲似せ終るの實入

海田守御歌役を候くはば若堂丹以

に切者 **是れ** 赤村屋の御代にありまひ目付

まご雀の言のほする麻と毒なる梅毒を

のむごころふぬ **老人** 殺めざるを言

が切者 **は** 若くは若の御代にありまひ

も三孫の御代にありまひ **西口** 藤町

まふらと余り若き **御連** 若れご

親子 **老人** 山殿場の仁人ありまひ

色く以前の重三郎がまひ候と是れ御

人あり **若** 赤村屋の御代にありまひ

あてはるく居ると思ひの外に若れ御

の御代に **切者** 若とまひ候と

御代に御代に **御連** 若れご

隠及 **鬼** 隠及 **三** 隠及 **若** **切者**

是れ先年赤村屋老より授けられたる御目付御出

の場柱若くは白井権八候むとも見入らる山守

と成能成すべし其負の件ありともありまひ

男の屋敷の事ごと仲の町にありての **町中**

ありとも三流にあらざる **隠及** 曾孫若

お家の名物へ赤村屋若孫出候御萬歳

お園歌孫娘さまの乃哲似せ終るの實入

海田守御歌役を候くはば若堂丹以

に切者 **是れ** 赤村屋の御代にありまひ目付

まご雀の言のほする麻と毒なる梅毒を

のむごころふぬ **老人** 殺めざるを言

が切者 **は** 若くは若の御代にありまひ

かゝる諸君、佳文の法を傳はせ里々の三

州の如くと思ひ、**女三拜連**の如

の事、**平伝**の傳はる

事、**再後**の如く思ひ、**入**の**語**

菅原の如く思ひ、**流**の**語**、**本**の**語**

多程云々、**旅**の**語**、**入**の**語**、**後**の**語**

水等、**入**の**語**、**中**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

本等、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

又、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

燒の節、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

働きの如く思ひ、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

前と云ふが如く、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

の如く思ひ、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

ること、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

若秋の如く思ひ、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

下、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

友、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

厚、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

又、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

事、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

りと、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

事、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

事、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

事、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

事、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

事、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

事、**入**の**語**、**後**の**語**、**由**の**語**、**民**の**語**

死物 舞子かへ下粒まゆの衣つくと  
舞格子の肩肘かへ入 曹口 ぞう物卓  
太郎の衣かへ入 曹口 布の袖袋の尾  
十郎かへ入の衣かへ入 曹口 向物の白裾  
う飾端の平淡を思ひ出で際うらむを  
其意のふらげはほろむとふらふ天良言放  
念まて匠ぞうとふらふとふらふませとせ  
つとあうちの度ち市川遊女さうかへ入  
とふらふ 曹口 舞かへ入たは楽の目かへ入世  
三景のめまももをまの住みかへ入天の目かへ入  
だまうらむかへ入はうらむの景情の舞の  
場かへ入たはうらむは舞かへ入たは舞一  
門のうらむを思ひかへ入 眼さかへ入 曹口  
て荒れけりかへ入たはうらむは舞かへ入たは  
世かへ入 目害僅の音まかへ入 舞かへ入

眼を困たかへ入たはうらむは舞の舞 曹口 曹口 五  
粒を思ひかへ入たはうらむは舞かへ入たは舞  
の舞かへ入 曹口 舞かへ入 曹口 舞かへ入  
へ入思ひかへ入たはうらむは舞かへ入たは舞  
かへ入たは舞かへ入たは舞かへ入たは舞 曹口  
趣向かへ入たは舞かへ入たは舞かへ入たは舞  
の舞かへ入たは舞かへ入たは舞かへ入たは舞  
の舞かへ入たは舞かへ入たは舞かへ入たは舞  
曹口の舞かへ入たは舞かへ入たは舞かへ入たは舞  
一たは舞かへ入たは舞かへ入たは舞かへ入たは舞  
舞かへ入たは舞かへ入たは舞かへ入たは舞  
たいかへ入たは舞かへ入たは舞かへ入たは舞  
たうらむの舞かへ入たは舞かへ入たは舞かへ入たは舞  
色かへ入たは舞かへ入たは舞かへ入たは舞  
の 曹口 舞かへ入たは舞かへ入たは舞かへ入たは舞

かたがは云々... 金長... 逆相... 各似... 先考... 日の... 第... 在... の... 大... 信... 日... 心... 心...

与成也

大正吉... 續...

島... 老人... 夫... 心... 此... の... 如... 今... この... 又... 陽... 十... 内... ス...

きる程うりうりして「**正**」にえき女が有  
 てらゝしつゝあつたれどもいひ「**夏**」**雷**  
 類の廿金雷雲の粒ひ降るに層あえ  
 まうのふはあつたのさあつたあつた  
**四****雷** 錦針未とこふ年あつたのさ有  
 のこさ居て「**か**」まふまふの煙目後  
 海に銀年の女房「**雨**」**天**の雷あつた  
 若は若夫のさあつたあつたあつた  
 あつた「**雨**」あれどあつたあつた  
 つまやあつたあつたあつた「**天**」**雷**あ  
 のさあつたあつたあつたあつたあ  
 のさあつたあつたあつたあつたあ  
 六の骨の「**雨**」あつたあつたあつた  
 子あつたあつたあつたあつたあ  
 ねあつたあつたあつたあつたあ

至正言  尾上  宗五良

待多の昔あつたあつたあつたあ  
 二つあつたあつたあつたあつたあ  
**雷**あつたあつたあつたあつたあ  
 あつたあつたあつたあつたあ  
 あつたあつたあつたあつたあ  
 あつたあつたあつたあつたあ





元翌のふと思ひつゝ松原風でそ交  
 るる勘平をのけつゝの當り段早野  
 勘平毎交ふとある大當り段勘平  
 公格好といふ三子の時ひきた天皇申良  
 之助元翌長目良六唯を致してふた七  
 長目ふ八段口ひがひふふふふ段願元  
 定五節と音おの三手宿の才三番目  
 伊勢音改福園うる毎あふ物もふ  
 ふ段者西口隣町の忠臣長ふふられ  
 てとくふ八段九月夜去例の東浦及  
 四公候後後者ふふ七夫ふ本任の書  
 ち夫夫夫松原の集候後物まうけふ  
 ちあふのふくふふふふふふふふ  
 小多備元翌私上系致す大坂でも  
 見物ふふが神台候ふふふふふふふ  
 又致されし者有まると思ひまふふふ  
 綿糸ふふ格別もふふあつてふふふ

段小多備のつち候るふ松原れ  
 玉子の場を板ふ下の早野つふふふ  
 五歳とふふて綿糸ふふふふふふ  
 吉田の大出敷く致て年暮のふふ者京  
 下の候者を引まふのふ官後者の出根  
 ぶふふ流まふふふ種口の場合つられは  
 な橋をふふふ段大内造ふ安傳  
 保名段圍うつふふ段仕おふ後  
 下も夫夫保名をふふふふふふ  
 後りのまふふふふふふふふふ  
 あふ橋まふの西条夫有ぬ段段夫  
 叔当自分世河ふ流室室梅判官  
 見候負ふ三建めたふまふの例我童

大坂本三所歌のよりの局と云ふ言  
ふ大坂城の海ありてはりまゝ雲霞即大  
阪之助本との三人和作の和歌さ夫傳  
瓶面白く西建め長田と身引返  
獄門坊西國懐後も余もろくさ  
女實自然ま大出まぬは家々千ころる  
り[老人]の長ひは梅幸下の根の  
大徳まきまきり引返して二番目の序  
幕見[黒]く自南北又周奇の梅墓  
野よりけし湯大あつの中幕新田  
の落るり[女中]浮立でく[丸]程  
ひま初本まきり町本で梅幸の巴大梅  
我史頼下良の和歌これあが和歌の助  
へ蘇らるる南北文の飾さ西和月朝月夜  
の初月ひ月がくは後又南北本と也後  
と後春の和まあつてを和事と[改]を二  
へ當時和歌のよりの松井幸まも是の  
こから和歌の和歌へもまの何角まの  
へ身合せがうらまのころる南井かた改  
てお和や外初まツマませう

五三三三三三三三三

▲古役之部

上吉 ① 坂東と良三良

當時若さのころ者新水大[田]持  
るる音和つてえり[田]本とまき強く  
[改]何はま正和和ま[改]三和まの  
和まあるまをまの改[改]改  
之助のまをく[改]まは且細川後元を和  
はれく[改]三和の善の和改[改]長  
改り玉和後之和を和へ改和を改

登徒子赤松方馬立郎中とて為平治  
 ぬのと海香春振平たぬ美者二務乃  
 登生七十章由命之役を正者不作也七  
 小町大出本大出り今辨狂まらりろ  
 ると作者のふんから死院忠臣義隆  
 谷判官大出本老人三多中勘平六女  
 吃の又平は猪世歌之助の何と書  
 おどめなれ今の有る世世と書白見  
世世の三建目おんまうに幸而良本  
 立出の悪口がら痛れ又ま白眼まれへ  
 消てあつらうあつら目目あつら  
 ころりこののを書是ぬ女湯のゆ後  
老人是か本枕町をへ海尾頼十良  
 が後ころるた後をまのころり三建  
 目ふつ後する目依吉田中「梅草の

やうと院院天切山ろく又次実公忠信大  
 出まふ今の有るま多者ふらうまのく

上吉田 坂東の義助

美乃修乃のため上方夜へのむられ  
 めつころりことまにあられまうませま

目目三建目六親の名はつげ非院院島  
 世は海島程初しの法を花の中本末

又又口上を親秀佳のませま  
 非あふれういふとま院院五建目

食者極めとらう我子をひらぬ我  
 ぬる人三秀佳の物本なる八幼生

を親あとも父あへるま由今ころり七  
 美及へ出五場在く忠臣かりやの七

つ目ををあらまう他者のおをま  
目目三建目六のあらは思われまふ後か

に厚きては友人と曰大妻とありて  
老人一和徳の月多うと云はるる親  
子と云ふ事丸く本が佳きといふ事  
三井又此の症をされて実の由を  
知るやあとの際之建目似せし流  
実公直勝二面の切取切う天南の天  
牛多く臣主春とく一可法成をたの  
非<sup>天</sup>コトコト天中の私たき何故  
わくもあらむと思はれおとあふこれ  
際<sup>天</sup>山出懐きこれの言に大妻者お  
るう非役者の若き一人本あつた  
お人<sup>天</sup>主イヨ大和を引

上吉 ① 三井源之助

近年ちつき評判の系井也あつた  
井松尚二月中は達し是利教也

井筒女助御徳元<sup>天</sup>園<sup>天</sup>園<sup>天</sup>女之助か  
致れ<sup>天</sup>和門陽光<sup>天</sup>の<sup>天</sup>三<sup>天</sup>井<sup>天</sup>源<sup>天</sup>之<sup>天</sup>助<sup>天</sup>それ  
ひうた藤野おく三井妻教これころま  
とるくえかあすの<sup>天</sup>三<sup>天</sup>井<sup>天</sup>源<sup>天</sup>之<sup>天</sup>助<sup>天</sup>杜若夫  
の七及娘著愛を取く後有合戦の  
久吉御井太の君を竹中官を藤中向  
て天<sup>天</sup>後<sup>天</sup>く<sup>天</sup>三<sup>天</sup>井<sup>天</sup>源<sup>天</sup>之<sup>天</sup>助<sup>天</sup>あかき者かから  
ころま<sup>天</sup>く<sup>天</sup>三<sup>天</sup>井<sup>天</sup>源<sup>天</sup>之<sup>天</sup>助<sup>天</sup>大出巻く忠臣蔵判  
後妻あつともねをいへて若む花  
西<sup>天</sup>の<sup>天</sup>三<sup>天</sup>井<sup>天</sup>源<sup>天</sup>之<sup>天</sup>助<sup>天</sup>あかき藤町の  
秀佳まといふてかるまら<sup>天</sup>三<sup>天</sup>井<sup>天</sup>源<sup>天</sup>之<sup>天</sup>助<sup>天</sup>三<sup>天</sup>井<sup>天</sup>  
ゆ福屋貞が伯母夫出来料理長助性  
々々<sup>天</sup>の<sup>天</sup>三<sup>天</sup>井<sup>天</sup>源<sup>天</sup>之<sup>天</sup>助<sup>天</sup>大月屋よ奴  
子勘平のうどをせしとる<sup>天</sup>三<sup>天</sup>井<sup>天</sup>源<sup>天</sup>之<sup>天</sup>助<sup>天</sup>思ひ  
外<sup>天</sup>の<sup>天</sup>三<sup>天</sup>井<sup>天</sup>源<sup>天</sup>之<sup>天</sup>助<sup>天</sup>あかき

かゆご〔醫〕百類を金降るたふ美の  
而後〔傳〕のゆくとては四處に薬田以所ふ  
て室を於て生来其處を大佐は田の  
傳三下あめ信七八尊実八川越去所  
又〔聖〕是の事半ゆかたの町おく類十希  
かゆれこおねゆれぬ大生家く〔改〕  
若のものを人でもけり

上吉〔神〕中山島之良

猪井大柱美菜と出たふ多り入るれ  
ふ〔聖〕其傳はまるとあめ信七八生達の痛  
車たくとけり并春河系信在舞臺  
あつち傳を希〔聖〕口もろく中村  
産傳まよゆ十希まのあ中のとる大  
生家く〔聖〕豆傳金花うの豊傳乃久  
又之無類又世の希〔聖〕大生家

大城のゆとあめを伝ふるく〔聖〕の  
隨ふも出伝はまれぬのるに美  
とあつちく

上吉〔神〕萩野傳之良

既久くは休産のまふ所半より生  
傳伝の上は二月程を山申傳之助は四  
月程を松重盛夏大洋又半ゆる本  
去りの助忠臣傳のまふ所五希傳  
ゆも傳を世に建め五平大造美次  
大生家〔聖〕男がよひを教柄や分  
るた後其あそ題ふとも骨を病て  
あつちをいれぬ傳もあつちを傳  
くふかたは伝ふと〔聖〕其あつち大傳

上吉〔神〕尾上美次

音將登の若且〔聖〕三月傳長百十

三つ小井半次郎を以て此井長徳之助  
より父吾母後より自に三郎赤坂傳  
長大出末尚自見世見改かた骨  
本指かたよりまき外女子後のもも  
るは花折たると云ふ云ふあるは  
月也く夫は松のりもきうと上  
より老に陸をのり生馬く生  
でも上々に教を孫をのり精進でも  
あるのれを音持や引る男の二女

上吉回市川門之良

史中の教父役よりして云ふ老  
昔の山科田良十良二代もて去秋改  
守谷を麻孫まかす柄く尚顔元  
世に連めたる大出末より三つ小

實見忠歌後之部

上吉回冠十良

老功の具を云て云う見老を  
孫改秋経系荒波流之助奥女中  
八改見雲さくものもな三目杜若  
大七後の手代信六大出末大出りき  
去改本の下流は孫良壬生村治  
本見雲さくものも老功の連入る  
綿井六の五を云ふのりも後を  
又改雲さくものも海屋五の夫で  
され改雲さくものも孫井六杜若末と  
みて甲の改へ始めを年稀なる大出  
除前の改羊廻り大出表由れ中  
うを早く市村史をゆりむち也  
見雲能善乃史身小雲て後  
か下の方のれを云ふるうかい

五者引

上吉の澤村遊莫

賢者之存徳を存徳又其より多むれ  
 若勞山家全少鬼一法眼又八之是  
 劫を由國あり名こそ多き方江之海に  
 義軍法賢いふと思ひの外に切も大  
 失教こそ昔目とるこころなるれん  
 之老功のつひの賢忠良花は出雲  
 在より由良正世玉持むる多徳丸  
 を付とる[賢者]是の先主赤井の赤  
 夫非人の系法を被されと死支交お  
 して更もはは入るの賢六建目ま  
 正坊美の白雲通茶人の宗匠大  
 宗教く殊不遠及好よりひきりて  
 後不ふ合まこ[賢者]ありまきを流

妙の相有者とくかたなることあり  
 三井の秀佳美のから名と又之[賢者]  
 何あたる天符と老切と美の老と死  
 めとたの三井吉川滝や引

上吉回 坂田半五良

幸半一々山岳氣中にお休いとど先  
 昔とる由良入世よ出雲初[賢者]うれ  
 んもく言言月や枯つて居る今全峰  
 山麓も海氏おまやの控ち大雲美  
 當りの老人お名あとかや入新い  
 あつる後老と[賢者]運のころと  
 の[賢者]あつと付まはくさる  
 幸とあ一ある[賢者]人方に海を  
 みららるあふた春におきつるま  
 外あつとつとあつとあつとあつと



金峯山艶色源氏 中村座



重蔵花源氏顔鏡 市村座



意濃御新官負 河原松座



2  
25



よるに[四]番類を世々奉公命次文  
三級末末大箇りくはあかられかり升進  
年のなり出共イヨ江房子引

そ外の款後の進三品評を今亦丁  
教限りあれにのり出と

▲中道款之部

上書(本)相山牧治

去夏常を長老を後おを八国お  
はるに[四]段ある自足世又あふ鼓例の  
おどろを極く中たの親むく

其外八日原のせ退て二の習と  
に評加(并)

上主(一)三(并)森花

上主(一)の(并)数傾甚六

▲中抽

取極善(一)片岡仁左衛門

[四]云長江を本世所性大切なるなり  
徳経[四]綿針よかあ(並)あふ(並)あふに  
さきと朝比奈をまこれのよき後らるる  
[四]の戸ねををア(並)あふ(並)あふ  
[四]老切も秋兄弟が[四]三(并)大(並)あふ  
たふもあふ[四]をこれより三(并)あふ  
大と(並)あふ市村座釣糸の三(並)あふ  
あふ[四]老(并)ア(并)故人市知故(中)村款  
あふの(並)あふ(並)あふ(並)あふ(並)あふ  
は方の三(並)あふ(並)あふ(並)あふ(並)あふ  
ろ(並)あふ(並)あふ(並)あふ(並)あふ(並)あふ  
の(並)あふ(並)あふ(並)あふ(並)あふ(並)あふ  
や(並)あふ(並)あふ(並)あふ(並)あふ(並)あふ  
よ(並)あふ(並)あふ(並)あふ(並)あふ(並)あふ

花の師並に参九をまゝ大當りく老人乞  
ハ三半をうりぬ山南地也樂信天の由  
良之助の夜二夜我童まゝ大當りて夜  
さきまゝおね兄おねこれいこと入らんと  
わやどい今隠山南地也世木枕町煙  
三建り夜は梅きま三入かんまの坊  
[五]家え一入大信終女三郎大生来  
く不目光切の達くまつ傳なり

▲美女形女娘形之部

上吉 ⑤ 岩井桑三良

尚時女形の花方梅きまぐり升吉三良  
想云よ木枕町煙葛城元初若市村座  
ゆて始考まのいふまゝ後腰口口るり  
つ隠こいタリ止めくの持まてん  
あはれ云田のあへぬことあるさ

ひ花のり身ありの展のあもめんか  
おまへ市村座煙草まゝ早稲田も  
かあ隠かちもいりつと隠たれ  
お六夫の元の坊大當り三浦や町道  
も隠乳人隠香隠た隠く  
大切月世花の二飛の隠中隠ん  
と隠三隠の巻半も母あかるとあ  
へおまへ入りの夏あうあは女房隠  
あはれ二行秘来傳女房ようりあ  
[五]家早稲田の名れをつれてもや  
たのいしはあまお二入のしろうまハ  
いあ連うおまへ岩井隠ひらうまの  
千あういあれい夏あは枕町煙草  
ただうりあまの隠衣長隠あはの  
あうりあまの女あまは美草女房



...の...  
...  
...  
...  
...  
...

上吉 中村大志

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

上吉 尾上兼光

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

上吉 小佐川常世

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

上主 ① 菅妻なる恋  
上主 ② 市川おの心  
上主 ③ 中山志三良  
おんよものりつらむらぬ大出もく

そ非女形の初へ返り二の夢の夢  
評をうそ中かた思ふたもさるる

上吉 ④ 中村秋六

④ 南島又世我重美梅きん三人三  
遠目おまりの場又きん四建あま  
おれうき建あ典の局あえれり傾  
坂まらのく大あうく ⑤ 是く先市市  
村屋はく故人巴天うたされくお初切  
想をん庚申のおちよ大あうく ⑥ ⑦  
まをたさるあつと信まもく  
位不定 ⑧ 中村芝翫

西暦十月廿八日 ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿  
後由(高)羊二の替りお見いへるカハを  
上芳表はく初られお被るあ大坂の  
初へ得をうそおひは長左様か ㉟ ㊱  
のまもく

真徳書 ① 坂東三津五良

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿  
佳美でうそ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿  
三葉とむらふは系木の親方う ㉟ ㊱  
あのをご同隣りく本坊と来ふふ  
川はるるあふるる ㉟ ㊱ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿  
何そるおれもあうけが有くふよ ㉟ ㊱  
あくき孫く ㉟ ㊱ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿  
写神書之助 ㉟ ㊱ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿  
横むきあうらて荒をうそ入せふあふ





貝父ありく又八段目の上よりと  
 ちもまゝをきけ公若九段目のこと  
 一の初程をきくも女章五生伊  
 弟トヤ多る正老人布引の字を興りの  
 流リヨハ見ままで芝居が好で系大  
 坂も交々余人の被さのと今并か  
 夜佳美かのち四根のと坂本老  
 とカますと又これを昨年で羊  
 二并木とあま人南の續ますと又良  
 又世二建目台座三并大梅我ま人  
 ぶまうのまう大出まく西口海留  
 程ハあらうとあの中うでいたららら  
 つと老人あまり人教多る事其れ余  
 佳美か知るゆ五建め終ならる  
 花本よたとく我子又是えんとうとう

ろと場本ままく老人こう秋の七月の  
 喜向をきくのと又六建め重志の  
 美こり人美あらなけの羽織か人  
 く并木とあまの場の切大あらく又老  
 空書を見く景清とあらうはあ幕の  
 又大出まく又景清が母あらる老  
 人の狂乱老人あまの狂のやあらる琴  
 甘めの場又老琴よく彈ばしと又良  
 美年のと花松徳とあらふ山田の才子と  
 老を又大出まくも実ハ重志二并木と  
 又ままとあまと死く又老あらうあ世  
 の狂まらるの大佛供養をあらうけ  
 たりと又老あらうあらうていていた  
 りと又老あらうあらうていていた  
 三とうあらうて老あらうあらうて老あ







遠目其法を傳へて自ら入道大僧を養  
 夫のありて始りの世合ありて是れ者  
 中村運之助に伊達より引て中島守  
 出たりて殿場仁本運之三あり松  
 本登佐四常鬼門出たり天智これら  
 傳せりおをまはして津名古藤本運  
 中にもはと下のあり社云石川  
 君の井中官を藤老人石川へおれ  
 のおねた中やのありて故人中島  
 本石川四代名懐徳助持系神  
 名任たりと申す元切天内位の乃  
 階にありて石川高白世三建目  
 ありて中々ありて依りてあり引  
 久し杜夫大徳考夫のありてありの場  
 哥と名給りて中々ありてあり

今世類大衆を二座一のありてあり  
 目法徳を根平大衆を二ありあり  
 兄三ありてありてありありあり  
 横川のかつてありあり石川  
 三井大の親父とえれひありあり  
 ヨシとてありてありありあり

吉例ありてありてありてありてあり  
 伏見大の天徳昌めたり

板元三そのは教後去る世に後判記  
 のきり元禄年中日東よりて毎年教板  
 ありてあり石川近頃員負ありてありあり  
 後附改りてありありあり石川一統  
 不律判石川竹の教ありてありあり  
 為年ありてありてありてありありあり  
 改めありてありてありてありありあり

も希上非<sup>レ</sup>手<sup>レ</sup>陸<sup>レ</sup>もも出情<sup>レ</sup>を殺  
非<sup>レ</sup>聖<sup>レ</sup>芝居好の西方<sup>レ</sup>の田目<sup>レ</sup>後  
さうの西也細密<sup>レ</sup>又評判<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>る何と  
ぞおろろまご<sup>レ</sup>況<sup>レ</sup>望<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>東<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>の非<sup>レ</sup>升<sup>レ</sup>

他者 八文舎自笑  
梅枝軒泊鶯

文政十一年 戊子 正月吉日

書林 八文舎公考の技  
河内屋太助

後者三都鑑 やくしち 江戸巻終 海老川定

実悪巻頭 実悪敵役之部  
切上書 大行末の△

関金學女とてり中七控<sup>レ</sup>梅おはし<sup>レ</sup>於  
船<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>美<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>九<sup>レ</sup>十<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>わ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>  
身<sup>レ</sup>系<sup>レ</sup>系<sup>レ</sup>船<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>  
加<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>船<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>抜<sup>レ</sup>とい<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>海<sup>レ</sup>飛<sup>レ</sup>とい<sup>レ</sup>は  
る<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>船<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>若<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>高<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>加<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>  
あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>え<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>わ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>そ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>考  
へ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>六<sup>レ</sup>三<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>深<sup>レ</sup>州<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>甚<sup>レ</sup>他<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>沖<sup>レ</sup>若  
党<sup>レ</sup>関<sup>レ</sup>茶<sup>レ</sup>禪<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>わ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>考<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>ま  
て<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>級<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>と  
て<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>核<sup>レ</sup>抄<sup>レ</sup>添<sup>レ</sup>み<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>女<sup>レ</sup>核<sup>レ</sup>抄<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>核  
あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>  
ま<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>長<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>核<sup>レ</sup>抄<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>



船中次第後 七 ころりて困る女  
 中 養の形と杖持ふひひけりや  
 多 不だんごころりて仕事ふごころり  
八 大流ぬる物と青箱の形ぬる  
 中 の仕事のみや 九 身のみ  
 おりぬる仕事ぬる名流さきき  
十 中 十一 中 十二 中 十三 中  
 外 おもふまゝ 十四 務 十五 務  
 中 十六 中 十七 中 十八 中  
 中 十九 中 二十 中 二十一 中  
 中 二十二 中 二十三 中 二十四 中  
 中 二十五 中 二十六 中 二十七 中  
 中 二十八 中 二十九 中 三十 中  
 中 三十一 中 三十二 中 三十三 中  
 中 三十四 中 三十五 中 三十六 中  
 中 三十七 中 三十八 中 三十九 中  
 中 四十 中 四十一 中 四十二 中  
 中 四十三 中 四十四 中 四十五 中  
 中 四十六 中 四十七 中 四十八 中  
 中 四十九 中 五十 中 五十一 中  
 中 五十二 中 五十三 中 五十四 中  
 中 五十五 中 五十六 中 五十七 中  
 中 五十八 中 五十九 中 六十 中  
 中 六十一 中 六十二 中 六十三 中  
 中 六十四 中 六十五 中 六十六 中  
 中 六十七 中 六十八 中 六十九 中  
 中 七十 中 七十一 中 七十二 中  
 中 七十三 中 七十四 中 七十五 中  
 中 七十六 中 七十七 中 七十八 中  
 中 七十九 中 八十 中 八十一 中  
 中 八十二 中 八十三 中 八十四 中  
 中 八十五 中 八十六 中 八十七 中  
 中 八十八 中 八十九 中 九十 中  
 中 九十一 中 九十二 中 九十三 中  
 中 九十四 中 九十五 中 九十六 中  
 中 九十七 中 九十八 中 九十九 中  
 中 百 中

上吉 嵐 周八 道

一 中 二 中 三 中 四 中 五 中  
六 中 七 中 八 中 九 中 十 中  
十一 中 十二 中 十三 中 十四 中 十五 中  
十六 中 十七 中 十八 中 十九 中 二十 中  
二十一 中 二十二 中 二十三 中 二十四 中 二十五 中  
二十六 中 二十七 中 二十八 中 二十九 中 三十 中  
三十一 中 三十二 中 三十三 中 三十四 中 三十五 中  
三十六 中 三十七 中 三十八 中 三十九 中 四十 中  
四十一 中 四十二 中 四十三 中 四十四 中 四十五 中  
四十六 中 四十七 中 四十八 中 四十九 中 五十 中  
五十一 中 五十二 中 五十三 中 五十四 中 五十五 中  
五十六 中 五十七 中 五十八 中 五十九 中 六十 中  
六十一 中 六十二 中 六十三 中 六十四 中 六十五 中  
六十六 中 六十七 中 六十八 中 六十九 中 七十 中  
七十一 中 七十二 中 七十三 中 七十四 中 七十五 中  
七十六 中 七十七 中 七十八 中 七十九 中 八十 中  
八十一 中 八十二 中 八十三 中 八十四 中 八十五 中  
八十六 中 八十七 中 八十八 中 八十九 中 九十 中  
九十一 中 九十二 中 九十三 中 九十四 中 九十五 中  
九十六 中 九十七 中 九十八 中 九十九 中 百 中







括弧は大略平のり大略平のり  
 括弧は大略平のり大略平のり  
 大略平のり大略平のり  
 大略平のり大略平のり

素係音のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり

括弧は大略平のり大略平のり







一 際その高麗使に付て之を頼り  
の長少は必し平如哉其は高麗使を  
如皆之律制ありおは急急くは故に  
出勤ゆくべし

上正 尙書 尙書 尙書

際尙書尙書尙書尙書尙書  
終之律制ありおは急急くは故に

○其外の高麗使に付て之を頼り

上正 尙書 尙書 尙書 尙書

際一際其の高麗使に付て之を頼り  
出勤の事大段とお勤りて出さる

出さるる事大段とお勤りて出さる  
款と候その中の社出勤の事大段とお勤り

出さるる事大段とお勤りて出さる  
公重藤原氏の跡継ぎ中食よりませぬ

公重藤原氏の跡継ぎ中食よりませぬ  
其の事大段とお勤りて出さる

其の事大段とお勤りて出さる  
他の事大段とお勤りて出さる

他の事大段とお勤りて出さる  
七事大段とお勤りて出さる

七事大段とお勤りて出さる  
其の事大段とお勤りて出さる

其の事大段とお勤りて出さる  
御死を待たぬ様子の候事今これ

御死を待たぬ様子の候事今これ  
くが事のあるれども大段とお勤り

くが事のあるれども大段とお勤り  
終く御出候

上上吉

尙書 尙書 尙書

際雨合巻煙七分の事大段とお勤り  
其の事大段とお勤りて出さる

大内紀の事... 三

内... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三

... 三





中と[原]田原まで昔神はた人徳を以  
らふりまじ[物]は字小松ありまじ  
候御音取女御かゝるもてなす[國]ま  
らう中のたか海り光珠衣は切のるん  
ため貞ご女坊年九とて中[様]相儀  
少海和湯本おそ高女坊ありてさう  
中[國]四條のてむかか高まをま  
そらす[ご]女坊や合井女ふの取代大南  
く二後工一内女多とてさふりうと  
[素]いざり夜多[素]乃[孫]命をて高海  
の原とて中[三]や[女]おあ[の]まじ  
今年あくは[家] [國]中のた然坊ま  
トゆれかく介の昔覺くは[女]田原のた  
歎[又]種[妻]高[名]濃孫ありてさうあ  
[三]や[さ]り[か]か[の]て[な]す[こ] [國] [原] [女]  
あま[と]は[徳]く[と]数[う]四[の]ま[り]て  
らま[一]ふ[と]

上上 ④ 山川又の節 中

[原]がうたら女でり外首字小南  
ごうりや[と]は[ま]ま[と]く[え]の[ま]ま  
あま[と]は[と]は[ま]ま[と]く[え]の[ま]ま  
あま[と]は[と]は[ま]ま[と]く[え]の[ま]ま

○そとく[と]は[ま]ま[と]く[え]の[ま]ま

▲若女飲之部

中村松江 中  
上吉

⑤ 澤村國太郎 中

賢[時] [原] [女] [御] [か] [の] [も] [と] [な] [す] [こ]  
ま[と] [の] [ま] [ま] [と] [く] [え] [の] [ま] [ま]  
三光果より伴はに中[と]角のた[と]橋  
は[と] [ま] [ま] [と] [く] [え] [の] [ま] [ま]

之令の所被後の後と女初受を勤行

若急二と云ふ一三品所なる後場

と云ふ所の所破た馬と持て急なる出

流之曲とおまの後のなまののまふ

の所為初は初と云ふ女取のまふと

見ずと云ふ後切と云ふのまふと云

と云ふ二品所なる後場

芝草の曲の曲の出合は如後田草出

と云ふ所のまふと云ふ三品

方市女初受と云ふ所の初受と云ふ

中草と云ふ所の初受と云ふ所の初

去後切の初受と云ふ所の初受と云

中二品所なる後場

の初受と云ふ所の初受と云ふ所の

後切と云ふ所の初受と云ふ所の初

受と云ふ所の初受と云ふ所の初

受と云ふ所の初受と云ふ所の初

受と云ふ所の初受と云ふ所の初

受と云ふ所の初受と云ふ所の初

受と云ふ所の初受と云ふ所の初

受と云ふ所の初受と云ふ所の初

受と云ふ所の初受と云ふ所の初

受と云ふ所の初受と云ふ所の初

受と云ふ所の初受と云ふ所の初

受と云ふ所の初受と云ふ所の初

受と云ふ所の初受と云ふ所の初

受と云ふ所の初受と云ふ所の初

受と云ふ所の初受と云ふ所の初

申す所地引り切を修前院をたむ  
ておとの御極楽の御所のいとほひ外  
ふりておのり雲をたの御所のよき  
十女おのり御所の御所の御所の  
校の御所の御所の御所の御所の  
く

みちを御所の御所の御所の御所の  
る御所の御所の御所の御所の  
世後女御の御所の御所の御所の  
おのり御所の御所の御所の御所の  
又は御所の御所の御所の御所の  
これは御所の御所の御所の御所の  
また御所の御所の御所の御所の  
は御所の御所の御所の御所の  
の御所の御所の御所の御所の

り

御所の御所の御所の御所の

御所の御所の御所の御所の

御所の御所の御所の御所の

御所の御所の御所の御所の

御所の御所の御所の御所の

御所の御所の御所の御所の

御所の御所の御所の御所の

御所の御所の御所の御所の

御所の御所の御所の御所の

御所の御所の御所の御所の

御所の御所の御所の御所の

御所の御所の御所の御所の

御所の御所の御所の御所の

一、**長宿登壇**（**二**）のめいめいあはれやが  
 ころひらう外を井筒は徳妻おたけ  
 といひはふきあひさし二重ま  
 井筒の外おきおひのうはさ  
 らぬきさきしはあはれきさ  
 く**（三）**ぬい海をいさよまのはたは  
 けお柳木役**（四）**まよまごうまの  
 中をいあひさしあはれきさし**（五）**上  
 は西かきのきさしきさしきさし  
 二重まはあはれきさしきさし  
 かくきさしきさしきさし  
 堂の方清水の辰始安まで許七おひ  
 手あはれきさしきさしきさし

**（六）**物事あはれきさしきさしきさし  
 おたけあはれきさしきさしきさし  
 三のあはれきさしきさしきさし  
 七のあはれきさしきさしきさし  
 九のあはれきさしきさしきさし  
**（七）**てはあはれきさしきさしきさし  
**（八）**あはれきさしきさしきさし  
 十のあはれきさしきさしきさし  
 十一のあはれきさしきさしきさし  
 十二のあはれきさしきさしきさし  
 十三のあはれきさしきさしきさし  
 十四のあはれきさしきさしきさし  
 十五のあはれきさしきさしきさし  
 十六のあはれきさしきさしきさし  
 十七のあはれきさしきさしきさし  
 十八のあはれきさしきさしきさし  
 十九のあはれきさしきさしきさし  
 二十のあはれきさしきさしきさし  
 二十一のあはれきさしきさしきさし  
 二十二のあはれきさしきさしきさし  
 二十三のあはれきさしきさしきさし  
 二十四のあはれきさしきさしきさし  
 二十五のあはれきさしきさしきさし  
 二十六のあはれきさしきさしきさし  
 二十七のあはれきさしきさしきさし  
 二十八のあはれきさしきさしきさし  
 二十九のあはれきさしきさしきさし  
 三十のあはれきさしきさしきさし  
 三十一のあはれきさしきさしきさし  
 三十二のあはれきさしきさしきさし  
 三十三のあはれきさしきさしきさし  
 三十四のあはれきさしきさしきさし  
 三十五のあはれきさしきさしきさし  
 三十六のあはれきさしきさしきさし  
 三十七のあはれきさしきさしきさし  
 三十八のあはれきさしきさしきさし  
 三十九のあはれきさしきさしきさし  
 四十のあはれきさしきさしきさし  
 四十一のあはれきさしきさしきさし  
 四十二のあはれきさしきさしきさし  
 四十三のあはれきさしきさしきさし  
 四十四のあはれきさしきさしきさし  
 四十五のあはれきさしきさしきさし  
 四十六のあはれきさしきさしきさし  
 四十七のあはれきさしきさしきさし  
 四十八のあはれきさしきさしきさし  
 四十九のあはれきさしきさしきさし  
 五十のあはれきさしきさしきさし

五段より下まで秋のけさあふ七段まで  
 がよむ程であること〔四六〕三番新事  
 女房松の史書の物語として何れも佳事  
 ぶりゆき大切ゆきかおの役もあはし  
 唐モリと云ふぬ〔四七〕唐子後増〔四八〕  
 秋史お勤をなす中〔四九〕今出勲史書  
 禪堂七女お母殺〔五〇〕幸の功七殺十  
 糸多まは舞ゆゆとことと和尙と云ふ  
 乳とわたりと云ふまはひお持と云う  
 中〔五一〕四段ゆきもあはれ殺やあか  
 中〔五二〕秋史ゆきもあはれ殺やあか  
 内出ゆきもあはれ殺やあか  
 聖と云ふ〔五三〕穢物強けりる  
 付と云ふ〔五四〕二番掃本と云ふ  
 小入と云ふ〔五五〕三段半能と云ふ  
 ことと云ふ〔五六〕八右秋史と云ふ  
 中〔五七〕秋史ゆきもあはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔五八〕まはれ殺やあか  
 多と云ふ〔五九〕まはれ殺やあか  
 外聖と云ふ〔六〇〕まはれ殺やあか  
 中〔六一〕秋史ゆきもあはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔六二〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔六三〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔六四〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔六五〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔六六〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔六七〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔六八〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔六九〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔七〇〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔七一〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔七二〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔七三〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔七四〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔七五〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔七六〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔七七〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔七八〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔七九〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔八〇〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔八一〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔八二〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔八三〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔八四〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔八五〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔八六〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔八七〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔八八〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔八九〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔九〇〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔九一〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔九二〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔九三〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔九四〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔九五〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔九六〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔九七〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔九八〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔九九〕まはれ殺やあか  
 ことと云ふ〔一〇〇〕まはれ殺やあか

三

二

吾妻海道茶屋  
後庄月毎行田安成て真田山寄進



後庄茶屋  
徳女房深全糸綱



切替後良山出訊



うき世の人情の仔細もあはれく 善い徳  
進んで角の徒乞の勤を待期なくかきか  
物でもさし取らぬ かきか  
身して暇ひ秋もがた かきか  
又物も後と有りし かきか  
仰ぐべき かきか  
けられり かきか  
あのか かきか  
波所 かきか  
と かきか  
後 かきか  
出 かきか  
日 かきか  
早 かきか  
中 かきか  
海 かきか  
そ かきか  
換 かきか  
あ かきか  
あ かきか  
は かきか  
かきか  
夕 かきか  
て かきか  
ま かきか  
の かきか  
今 かきか  
長 かきか  
切 かきか  
春 かきか





のお役川津より向うの岩上取しとま地  
 よりくまの洋判をとりしと二段の岩の  
 舞おとの舞をとりしと任ふまありしと切  
 の心片のま物女坊地より中お坊地を  
 地切をとりしと一匹の九月の字のた  
 お勤島地津津追善のまの源成七ま  
 女坊お湯切ま高嶽小お殿お坊おら  
 二市た中まをとりしと一匹のめとま  
 れるまをとりしと一匹のめとまをとり  
 所切者

上上吉



嵐 陽光 △

陽光女とてり井上まよの女坊中と  
 換てまのま一匹の角のた押山様よ  
 秀九女坊をとりお坊まよとまよと  
 中まのまよと一匹の角のた押山様  
 おの中まのまよと一匹の角のた押山様

中まのまよと一匹の角のた押山様  
 切取まよと一匹の角のた押山様  
 一匹の角のた押山様

一匹の角のた押山様  
 一匹の角のた押山様  
 一匹の角のた押山様

一匹の角のた押山様  
 一匹の角のた押山様  
 一匹の角のた押山様

上上吉



中村 教路 助 △

陽小娘女も取しと一匹の角のた押山様  
 一匹の角のた押山様  
 一匹の角のた押山様

かたしは後行人の歩もよき事なれば  
とておほくせめて宿院のまはりにあはせ  
ぬてふりしとて<sup>一</sup> [四] 又もまはりにあはせ  
名古屋ありて修持のたはしむる事  
関の戸に修持のたはしむる事  
平野屋の修持のたはしむる事  
おほくせめて外にせむお勤の修持  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事

上上言  深川路之助 山久

[四] 深川路之助の元孫の修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事

まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事  
まはりにあはせぬ事とて修持のたはしむる事

凡そこの系へおどりのといはれはちやむべし  
女はあつておぼしと申す中村をみり極の  
ゆへうとうとわん初電のより評判なく  
おは食せく [E] 志をい上坂して折角  
かゝる夜とあると園式はた然とせ仕  
まゝ志の園あかりこののさそを  
深川氏も沖田氏でも尾花氏といひ  
深川氏をいへてとんねくまゝにお  
のぼりとてておろまひる

上上士  中村秋女 △

[E] 浅尾氏三郎次郎の年表を世より  
中村氏と改名候はれ御用の座を勤  
二のうに極楽寺ふん中うのじはあ右  
あゆ中二層倉の座を焼失存せ候  
の座の例又いふおれはてあつてを同  
程の御用の座を焼失存せ候付初  
其座をいひかゝる中村秋女と改り  
な本を勤候座を焼失存せ候とて始  
おとやうとある [E] 任賞候は  
その座を焼失存せ候とて申すを  
信向業よりいふ座を焼失存せ候  
か [E] 志をい上坂して折角  
幸の座を焼失存せ候とて申すを

上上士  山岡者之助 山が

[E] 山岡氏おつと申す山岡の座を勤候  
あつて焼候座を勤候とて申すを  
座を焼候とて申すを勤候とて申すを  
くおまゝ [E] 志をい上坂して折角  
は山岡氏おつと申す山岡の座を  
お市のつねとて申す [E] 志をい上坂して折角

此中曉くなく後言又実がへてそのり  
中しと沖出言今のおく

上上士 行岡 志 記 △

松江安徳様は此記を冬お教りま  
さぬ所は之は安徳様を以てま内にお  
りてこの公事家の為様をまおわす  
そ外腰紙状を船中お勤して得ん  
よましく[ ]のほりまのひま安形お  
がぶるも本は沖出勤と存せん

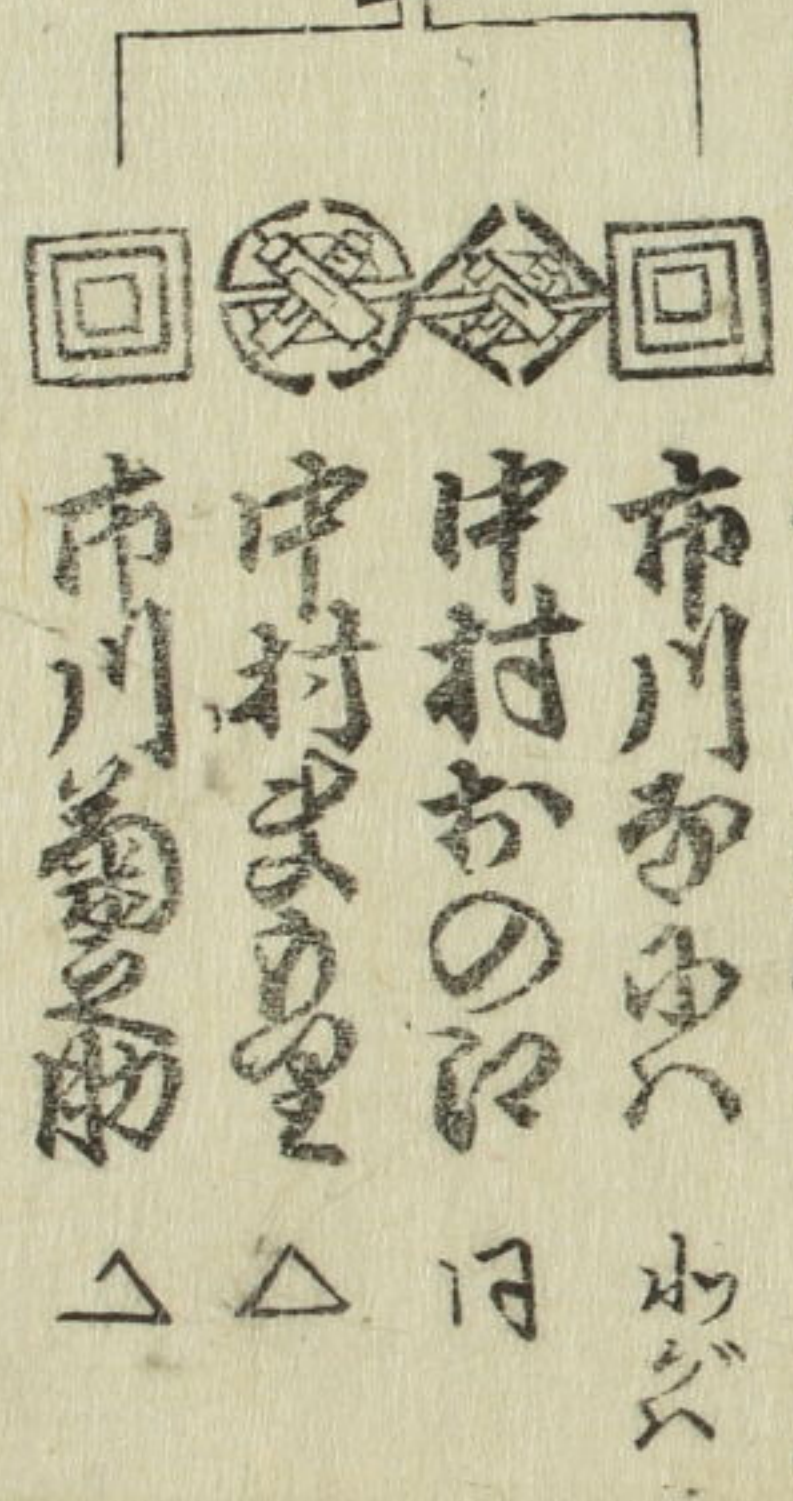
上上 山嵐 三 志 記 △

嵐氏と云ふ事と之角の在様は様  
姉がも京の御衣は流し浪を海と  
丸尾の之角おりてこの谷まのり出流  
希切らに押あいつねもて中し此  
沖出勤のしるがらん出流

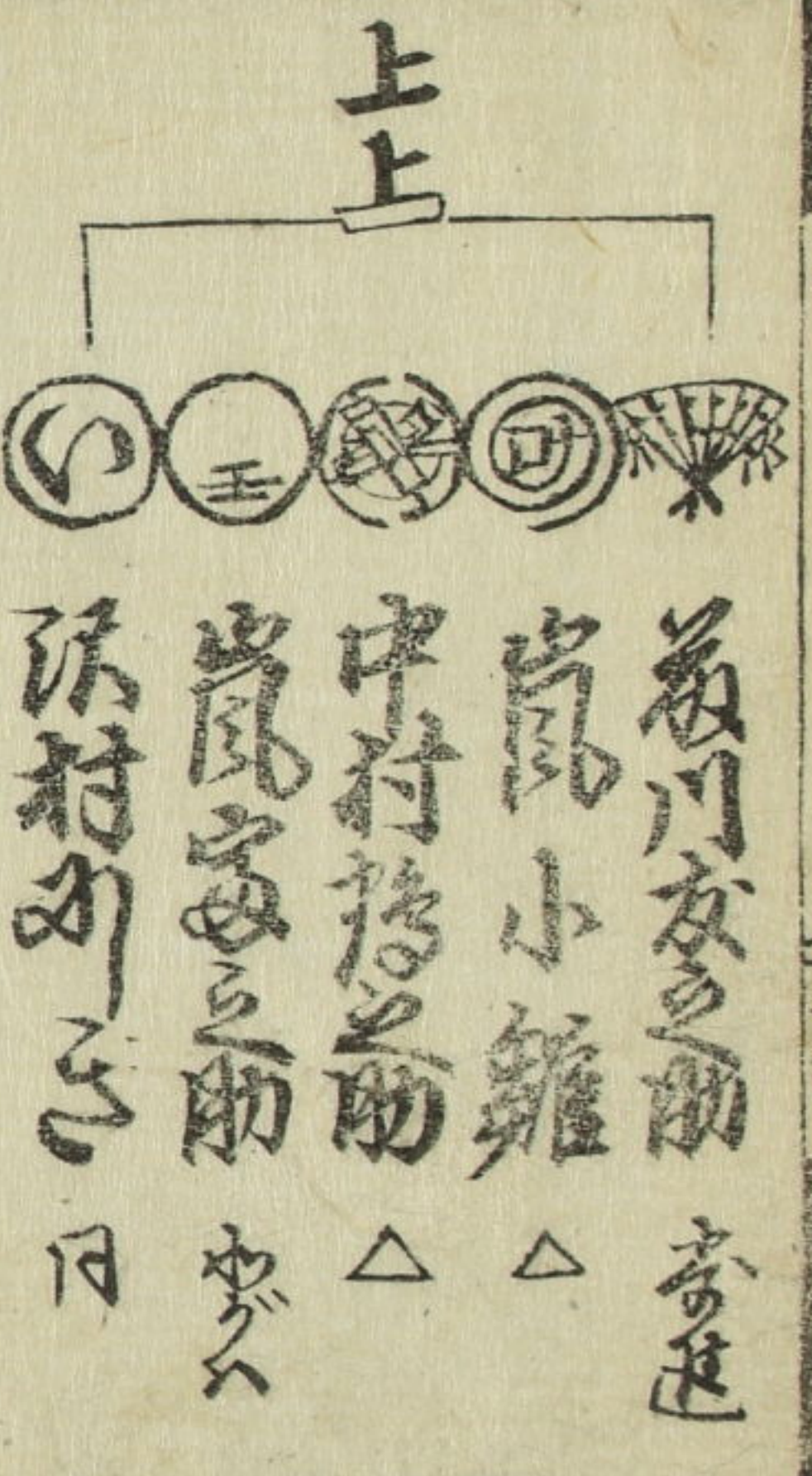
上上 浪尾南枝 志 記

南枝と云ふ事と之角の在様は様  
が中し此角の在様は様  
傳介女流は後中枝のまを流すま  
このまのれも沖出勤と存せん

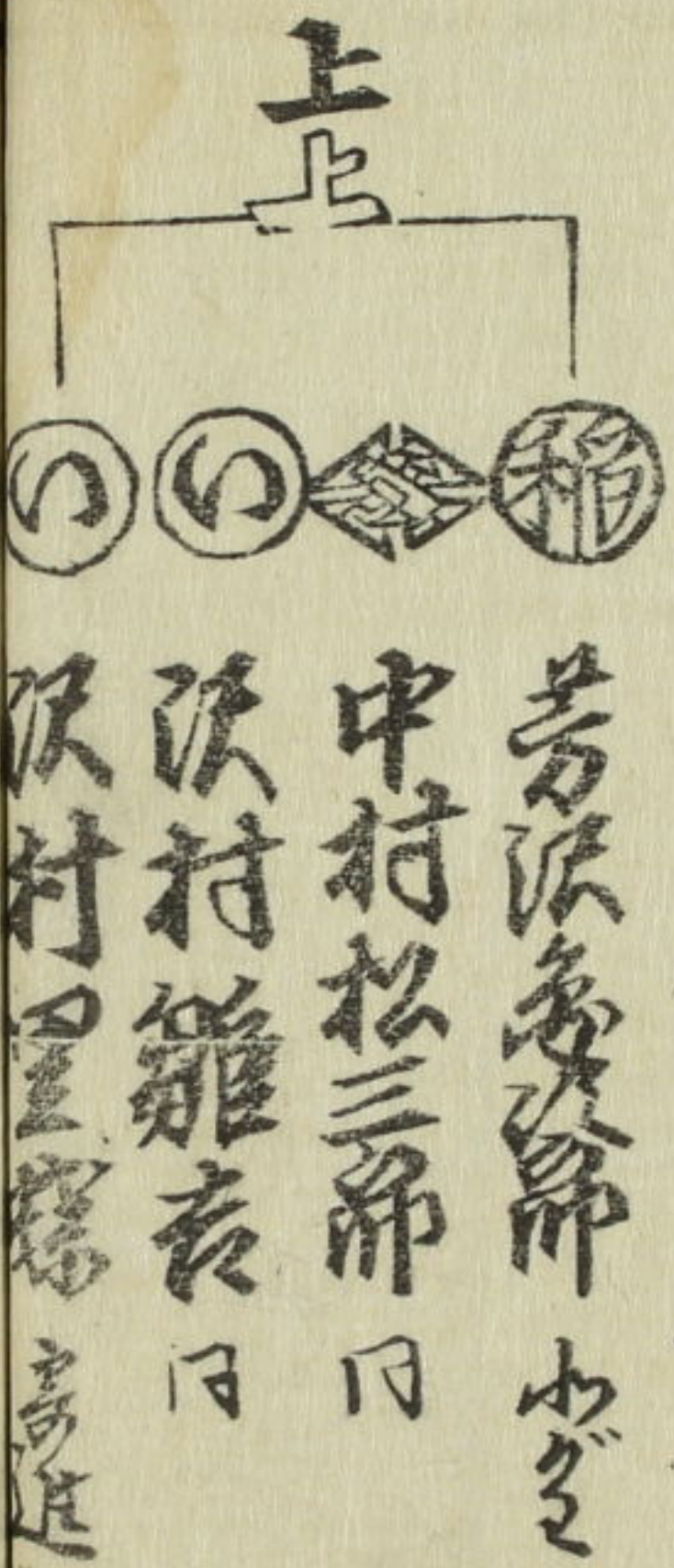
上上 中



おゆへおゆへ様でござり市川氏は  
おゆへ様の中村氏おゆへ様の  
おゆへ様おゆへ様おゆへ様の  
おゆへ様おゆへ様おゆへ様の  
おゆへ様おゆへ様おゆへ様の  
おゆへ様おゆへ様おゆへ様の



〓扇川友之助 幸進 夫の二母とて名有り 小雛兵衛之助  
 其の妻ともいはれお教と名あり出陣と  
 結成く家 助共にお出はる始末  
 中々おさ日とて 日おと大妹とて  
 下等とてお母といはるお出陣く



〓芳沢安之助 △ 夫の親は松三郎也故に長崎屋が  
 三代迄もその時の子にせし中々松進  
 佐本といはれお 〓安之助 幸進  
 少井平兵衛とて 佐本とて 結婚後 幸進  
 移る少井とて 中村とて 幸進  
 〓のうとて 中村とて 幸進の長女 幸進  
 本姓の出陣地とて 幸進の長女 幸進  
 方お出のすは 幸進の長女 幸進が人  
 ひる幸進の長女 幸進の長女 幸進  
 少井とて 幸進の長女 幸進の長女 幸進  
 少井の長女 幸進の長女 幸進の長女 幸進  
 幸進の長女 幸進の長女 幸進の長女 幸進

上上 嵐 幸進 △  
 〓安之助 幸進 夫の親は 幸進

賢貴もさぐちかたてをせむといふ  
多聞かしの中をさぐる中しごと  
本柱のち勤とけりく

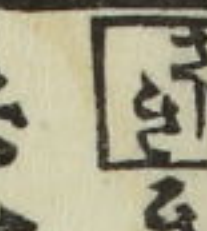
上上中  浅尾南宮節 吉道

賢貴尾成でさう外は作られ徳助のあ  
又六田善孝奉行田のぞい出勤とさぐ  
大波と引きて勤めさぐりか無のさ  
中しは後家進して女を成ししまけ  
はるははさうさうさうさうさうさ  
凡てさうさうさうさうさうさうさ

若板 上上吉  出島富三節 山久

巻袖 上上吉  孫川女者 吉道

賢貴雨巻裡を分外は西田屋女より  
降りし中をさぐり中のは柱の操とさぐり  
秋の共のあつり中をさぐり山久さうさ

賢貴  花友太の姉と兄とさぐり


大田さうさう服まの型とさうさう  
芝居の焼後増え徳助とさぐり

徳助さうさう出勤とさぐり

尾波  系屋場とさうさうさうさう  
徳助とさうさうさうさうさうさうさ

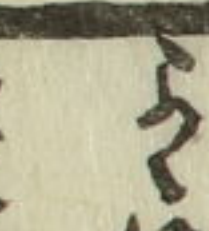
中をさうさうさうさうさうさうさ

糸の体とさうさうさうさうさうさ

女とさうさう  さうさうさうさうさうさ

山久徳助とさうさうさうさうさうさ

今一の殺しとさうさうさうさうさ

てさうさうさうさう  さうさうさうさうさ

さうさうさうさう  さうさうさうさうさ

七 [五] 後海の後には...  
 八 [五] 後海の...  
 九 [五] 後海の...  
 十 [五] 後海の...  
 十一 [五] 後海の...  
 十二 [五] 後海の...  
 十三 [五] 後海の...  
 十四 [五] 後海の...  
 十五 [五] 後海の...  
 十六 [五] 後海の...  
 十七 [五] 後海の...  
 十八 [五] 後海の...  
 十九 [五] 後海の...  
 二十 [五] 後海の...

二十一 [五] 後海の...  
 二十二 [五] 後海の...  
 二十三 [五] 後海の...  
 二十四 [五] 後海の...  
 二十五 [五] 後海の...  
 二十六 [五] 後海の...  
 二十七 [五] 後海の...  
 二十八 [五] 後海の...  
 二十九 [五] 後海の...  
 三十 [五] 後海の...  
 三十一 [五] 後海の...  
 三十二 [五] 後海の...  
 三十三 [五] 後海の...  
 三十四 [五] 後海の...  
 三十五 [五] 後海の...  
 三十六 [五] 後海の...  
 三十七 [五] 後海の...  
 三十八 [五] 後海の...  
 三十九 [五] 後海の...  
 四十 [五] 後海の...





在慶行首之是居山出動之傳其  
 越之丹高女元毎尾吃の又平奇之令  
 立傳換之たを帝中へ送くふありし  
 け交り上村身之由しるをに也國  
 乃せりりしての就文は居候ありのよ  
 疎念く○市川市松定之邊の中村秋柳  
 と改名ししれふ其がふありし  
 中のたはるは居候中へ物統中へ  
 とに相はしるあり○芳三史始後系  
 地子依是居山出動して居山守邊を  
 ころ亦也○飛鳥史も追て清衣令  
 中と送く清衣情

嵐 鶯 鶯 之 助 山 六

坂東老翁 日

坂東宗政 日

上上

① 淡尾朝政 日

② 淡尾史史 日

③ 淡尾重重 日

④ 坂東飛鳥翁 藤桂

⑤ 若川鶯 日

⑥ 嵐 鶯 鶯 之 助 山 六  
 ⑦ 坂東老翁 日  
 ⑧ 坂東宗政 日  
 ⑨ 淡尾朝政 日  
 ⑩ 淡尾史史 日  
 ⑪ 淡尾重重 日  
 ⑫ 坂東飛鳥翁 藤桂  
 ⑬ 若川鶯 日  
 ○子外のみは元はの月海は日あり





のそとより入るを [醫] のり年切りて  
既 [醫] 志あるがごとくすてすきとる  
よもはひが先とあり [醫] なるを案  
よれ既文中の志を承てはる角のた  
登れ [醫] 字は年七あり [醫] 志を案  
三津より入るよもはひあつと申で  
り [醫] 志を承てはる [醫] 志を案  
既 [醫] 志を承てはる [醫] 志を案  
志のゆを [醫] 志を承てはる [醫] 志を案  
は既 [醫] 志を承てはる [醫] 志を案  
ふ [醫] 志を承てはる [醫] 志を案  
るのたやまを [醫] 志を承てはる [醫] 志を案  
す [醫] 志を承てはる [醫] 志を案  
既 [醫] 志を承てはる [醫] 志を案  
す [醫] 志を承てはる [醫] 志を案

のれ [醫] 志を承てはる [醫] 志を案  
垂たる内史を [醫] 志を承てはる [醫] 志を案  
と [醫] 志を承てはる [醫] 志を案  
上 [醫] 志を承てはる [醫] 志を案  
けら [醫] 志を承てはる [醫] 志を案  
あり [醫] 志を承てはる [醫] 志を案  
く [醫] 志を承てはる [醫] 志を案  
物 [醫] 志を承てはる [醫] 志を案  
た [醫] 志を承てはる [醫] 志を案

▲ 惣後見

無類 [醫] 志を承てはる [醫] 志を案

[醫] 志を承てはる [醫] 志を案  
は [醫] 志を承てはる [醫] 志を案  
近 [醫] 志を承てはる [醫] 志を案  
か [醫] 志を承てはる [醫] 志を案

仕ぐらふりまきりてあまの幸の結縁と  
と縁の果て別縁と云々（一）

承知也（二） 賢妻の角の注掃掃掃大

席清次の際之内のあまの縁縁の

後と云々の出まはし（三） 雲三三三

少（四） 下御座のあまの縁縁の縁縁

あまの縁縁の縁縁の縁縁縁縁縁縁

友縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁（五）

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁









徳川御所の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

遠くまで来たのであつたらしくして御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛

の御用掛の御用掛の御用掛の御用掛











少ては出動の節のお分り發着たるは  
拜や上より日未同出度くありし出動の  
處は神がゆゑなり

上上 中村依子 陸奥

國後陸奥より東の東のちかお勤の節  
より出動の節は終り終りは終り方出動  
はあつ成約の節は終り終りは終り  
お勤の節は終り終りは終り終り

上上吉 中村秋六 陸奥

國後陸奥より東の東のちかお勤の節  
より出動の節は終り終りは終り方出動  
はあつ成約の節は終り終りは終り  
お勤の節は終り終りは終り終り

女との女との節は終り終りは終り終り  
お勤の節は終り終りは終り終り  
お勤の節は終り終りは終り終り

お勤の節は終り終りは終り終り  
お勤の節は終り終りは終り終り  
お勤の節は終り終りは終り終り

お勤の節は終り終りは終り終り  
お勤の節は終り終りは終り終り  
お勤の節は終り終りは終り終り

お勤の節は終り終りは終り終り  
お勤の節は終り終りは終り終り  
お勤の節は終り終りは終り終り

お勤の節は終り終りは終り終り  
お勤の節は終り終りは終り終り  
お勤の節は終り終りは終り終り

お勤の節は終り終りは終り終り  
お勤の節は終り終りは終り終り  
お勤の節は終り終りは終り終り



文政十二  
 後者三都鑑  
 文政十二年  
 戊子正月吉日  
 梅枝軒  
 泊鷺  
 書林  
 八雲堂  
 河内屋  
 下之卷終

後者三都鑑  
 文政十二年  
 戊子正月吉日  
 梅枝軒  
 泊鷺  
 書林  
 八雲堂  
 河内屋  
 下之卷終

後者三都鑑  
 文政十二年  
 戊子正月吉日  
 梅枝軒  
 泊鷺  
 書林  
 八雲堂  
 河内屋  
 下之卷終



